

2017年度 夏会誌
奈良高専現代視覚文化研究会



しらはえのしゅ

まえがき

どうも皆さん、ようやく完成いたしました2017年夏会誌です。去年はまえがきでうだうだ「留年しそう〜」などとはざいていましたが無事進級できました。三年生にもなるとても忙しくてこの前書きも締め切り一日前に書いたりしています。……よく考えたら二年生のときもこんな感じでした、ガハハ！ 締め切りギリギリまで放置してたら思考に「この前書きいる？」などといったノイズが走っていますがげんしけんの紹介をしたりやることは色々あるのでもう少しお付き合いください。

げんしけんって同好会なのですけれども、あえて同好会として活動しています。というのも、部になってしまうと活動義務というものが発生します。そうすると本来自由であるべき創作活動に支障があるという理由で活動義務のない同好会として活動しているんですよ。季節ごとの会誌こそ皆に出してもらおうようにお願いしていますが、さすがに何もしないというのは部活動としておかしいので、さすがに毎日部室に来いなさいだとか、毎日創作物を提出白だとかそういうった厳格な制限はまったくありません。簡単にいえばメリハリつけて自由に創作活動しようってことです。

今回の夏会誌はウェブ上のみでの公開ですが、次回の秋会誌では高専祭りにもなつて直接配布いたします。ぜひとも我々が奈良高専げんしけんブースまでお越しになつてください。

我々はそのような人でも歓迎します。一度でもいいのでげんしけんの会誌を実際に手に取ってください。会誌を読んでいただけるだけでも我々は喜び飛び跳ね、会誌を通じてげんしけんに入ろうという人がいれば涙を流しながら出会いに感謝するでしょう。まあ大げ

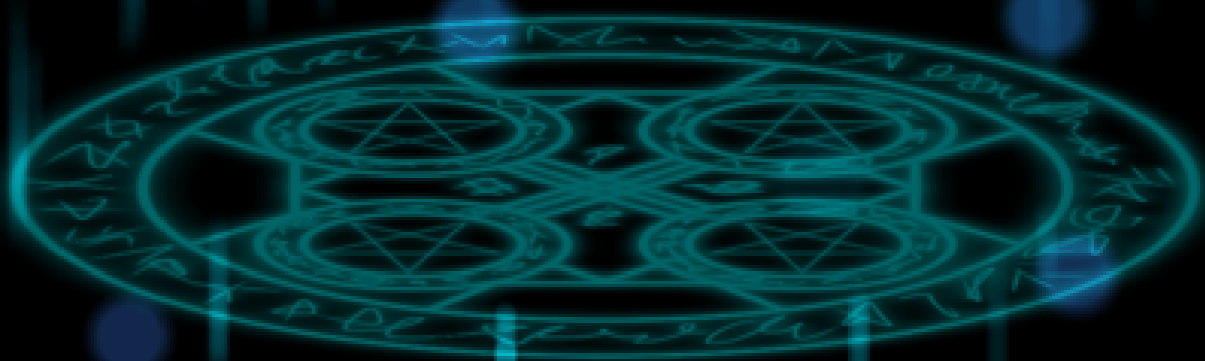
さですがそれぐらい我々はげんしけんを知ろうとする人を歓迎します。気後れはしないでください、我々はいつでも待っています。

それでは、つぎは高専祭で直接皆さんに会誌をお届けするのを楽しみにしています。

情報工学科三年

フランカー

小説作品



禁忌のレポート大魔法

みゆとろ

「レポートが終わる魔法を作ろう」

切実に呟く。

「ついにイかれたか？ 岩出」

そして、切実に呟いた俺の思いを砕いてくるのは友人の山本だ。

「ちげえよ。レポートが早く終わる魔法が作りたんだよ」

だってレポートである。出来ることならやりたくない。

「なるほどな。だが、魔法はイかれているな。というか違うくないだろ」

だってレポートである。(略)

「捗るだけでもいいんだ。なんかいいか？」

そう言うと、山田はガバリと振り向いた。心当たりがあるのか？

「捗るだけでいいのなら……」

「……ゴクリ」

「いけるかもしれない……」

言い終わる前に俺は山田の腕をつかんで走り去った。

ヒヤッホーという声を長い廊下に響かせながら。

◇

「で、どうやればいいんだ？」

走り続けること数分。俺たちはいつものまにか山の頂上まで着いた。どうやら少しテンションが上がりましたよ。

「簡単だ。ここなら申し分無い性能を發揮するだろう」

え？ こいつマジで魔法を作れると思ってるのか？ アホじゃん。

「お前が言うなよな」

「なぜ心を読めたし」

さては、エスパーか？

「ゴホン……それではここに立て。ここがいい感じだろう」

「いい感じってどういうことだよ」

「そんなことはどうでもいい。さあ立て。レポートが捗る魔法を作りたいのだから？」

それもそうだった。でなければいきなり山になんて行かないだろう。制服だし。学校帰りだし。

納得して指定された場所に立つと、なにやら山田は携帯をいじり出した。ググっているのだろうか。無駄なのに。

ちなみになぜ無駄なのかはこの前『レポート 終わる魔法』とか『レポート 捗る魔法』でググったからではない。決して。

「よし、ではいくぞ。今から言う言葉を唱えろ」

「お、おう」

まじかよ。こいつ俺よりも馬鹿だ。

しかしまあ、言い出したのはこちらであるからやめたくてもやめないのだが。

しかも、まだ不可能だと確定したわけでもないし。

「きやるるるーん。だ」

「は？」

「きやるるるーん。だ」

二回言えとは言っていないのだが。

「なんだよそれ!? 少女向けのアニメでもそんなのねえよ!」

「言わないなら帰るぞ。俺は忙しいんだ」

何言ってるんだこいつ。きやるるるーん。とか言ってるくせに。

「ぶん殴るぞ?」

「さーせん」

「で、言うのか、言わないのかどっちなんだよ」

「い、言うよ。言えればいいんだろ?」

まったく、なんで俺がこいつの遊びに付き合わなきゃならないんだよ。

「言いたくないなら言わなくてもいいが。その場合は俺は帰るが」

「あー、分かった！ 言いたい！ 言わせてください！」
本当になんだこれ。

俺がアホみたいじゃないか。

もしかすると冒頭あたりでバレてるかもしれないのか。俺がバカなこと。

「い、いくぞ……きやるるーん」

……

びこん。

「おけ」

おけか。……とかびこんってなんだ？

「……な、何の音だよ今の」

「決まってるんだろ？ 動画だよ。ど・う・が」

「は!?!」

聞き捨てならん。俺のきやるるーんがあるのか!?! 不味くね？
それ。

「消せよ?」

「いやだね。……そして俺はここで魔法を完成させる!」

よめたよ！ この後どうなるのかも分かったよ！

「この動画をばらまかれなくなければ、レポートをやれ!」

「鬼かよ!?!」

「さて帰るぞ。俺は忙しい」

ザザザと山を下る山田。

俺の顔はおそらく死んでいるだろう。

ちなみにその魔法はとても効果があった。

了

小学校の校歌なんて「凄いぞ僕らの山・川」がほとんど

キツタヌ

奈良県と大阪府の県境に聳える山、二上山。今でこそ『二つの山頂』の意味で、「にじょうざん」と呼ばれるが嘗ては『それぞれ雄岳と雌岳に宿る神』つまり、男女二人の神様として「ふたかみやま」と呼ばれていたという。奈良県側の大和の民達からは「天の二上」（あまのふたかみや、西側にあることから「日没の山」とも呼ばれていたそうだが。

真相は分かかっておらず、荒ぶる魂によって境界の守りとする為とも、単に嘗て太陽の沈む西側に死者の世界があったと信じられていたからとも言われるが、二上山には大津皇子が眠っていらっしやる。

二上山は、讃岐岩が良く採ることが出来て特産品になっており、二上山は死火山の為、大阪側には太子温泉がある。飛鳥時代以前は、正しく日本の中心地であったからこの山の近くには日本最古の菅道もある。

これは、そんな二上山の雌岳にある祠に刻まれたもう誰も知らない、知ることの出来ないもう一神の神蛇大王の話である。

「りゅーさん！りゅーさん！」

そう興奮気味に走る少女は都。歳は十七、八ぐらいだろう。か。巫女装束を身に纏っているが特に何処かの社の巫女ではない。神に仕えるといった点では同じであるが。

「どうかしたのか？都」

読んでいた巻物から目を離して答える男性に決まった呼び名は無いが、都がりゅーさんとしか呼ばないのでここの十数年はりゅーさんである。

「遂に完成したよ！この……風鈴が！」

都が仰々しくりゅーさんの前に出したのは、讃岐石で作られた風鈴だった。

「今回ののは音色重視の自信作ウ！」

と踏ん反り返る都に対してりゅーさんはクスリと笑うと

「じゃあ風通しの良い所にでも吊るか」

「えー。そこは、早速聞いてみるか。とか言うんじゃないのー？」

りゅーさんのマネ（？）をしながら都は抗議する。

「こーゆーのは、ふとした瞬間に聞こえてくるから良いの。都の自信作なら尚更一番いい音で聞きたい」

「それなら良いのだ」

と言いながら都は、既に背を向けて歩き出しているりゅーさんを追いかける。

何様のつもりだ。お子様だ！都様だ！……夕餉の支度を始める。食べている最中に良い音が聞こえるかもな。はあい。

「その日の二上山は騒がしかった。」

「最近多いねえ……。りゅーさん何も悪い事してないのに」

竹箒に顎を載せながら都がぼやく。

「毎日怠惰に過ごすのは十二分に悪い事じゃあないか？」

その言葉にりゅーさんが反応するが

「社会から一度も施しを受けた事も無いのに社会の為に働く必要はないでしょう？対価も無しに神サマが動く訳ないのは私でも分かるよ」

「この状況を見るに、都『でも』じゃなくて都『だから』分かる事なのかもな」

そもそも自分を神だと思っているのは都だけだろうがな。とりゅうさんは独り言っ

「んじやあ、追ひ払って来るわ」

「ん。行つてらっしゃい」

都に片手を挙げることで応えて、りゅうさんは巨大な穴に飛降りた。

数分後、激しい轟音と共にりゅうさんの討伐対が二上山を駆け下りていった。

その日のもう斜陽も消えようかという時間にりゅうさんは都の下に戻ってきた。当然、いつも通り直ぐに帰ってくると思つていた都は怒り心頭に発していた。そんな都を華麗にスルーし、りゅうさんは釣ってきた魚を焼き始める。いつも通りである。

都は自身に降りかかる強力な圧によつて目が覚めた。否、強制的に意識を覚醒させられた。と言つた方が正しいだろう。本能が、敵わないと、逃げるべきだと訴えてくる。何からなのかは、分からない。しかし、逃げなければソレから逃れなければ、

殺される――

けれども、体は痙攣を起こし自由に動かせず、過呼吸になつていて真面に息も出来ない状態だ。自分が何に対して怯えているのか分からない事も恐怖を増長させていく。

何の前兆もなく、いきなり都の背中にナニカが当たる。都は悲鳴を上げることが出来ない。

「――大丈夫か。都」

その声を聞いた瞬間、体にかかつていた圧が消え、体中の力が抜ける。

「りゅう。りゅうりゅう、りゅうー、さん……」

原因不明の圧が消えたからといって、恐怖は消えない。寧ろ時

間を増すごとに強くなつていく。

「大丈夫だ。大丈夫」

りゅうさんの声を聞いていると、だんだん落ち着いていくのが分かる。りゅうさんが何か力を使ったのだろう。と都は考えた。恐らくは都にかかつていた圧も。

「立てるか？」

りゅうさんの問いに都はふるふると首を振ることで返事を返す。

「腰、抜けちゃったみたい……」

「分かった」

と言つて、りゅうさんは都を横抱きする。所詮お姫様抱っこ、と言うやつである。

りゅうさんは外に出ると、都をそつと下ろし、本来の姿へと変える。巨大な巨大な大蛇である。りゅうさんは、その黄色い蛇特有の眼で都を見つめ、口を開く。都は、何の躊躇いもなくそこに入る。りゅうさんは口を閉じ、大穴へと入つていく。

「ここまで来れば彼奴の知覚範囲外だろう」

油断は出来んがな。と、りゅうさんは都を安心させる為なのか、普段より少し大きな声で言い切つた。その事に気が付いた都は、思わず頬が緩んだ。

「ところでりゅうさん、今何が起こつているの？」

「大妖怪が空に現れた。アレに勝る者はそうは居ない」

「りゅうさんは気付いていたの？」

「いや。恐らく隠り世の類を移動して来たのだろう。当然現れた」

都に危険が及ぶ事は極力避けたいしな。と続ける。

「そろそろ、その服をどうにかしないとな」

都の巫女装束はりゅうさんの口に入った時に付着したりゅうさんの唾液でいっぱいだった。

「えー。これ何だかりゅうさんに染められているみたいで好き

「なんだけど」

と都が言うと、りゅうさんは馬鹿野郎。と都にデコピンをする。

「野郎じゃないですうー。歴とした女の子ですー！」

「はあ、いいから立て」

「仕方がないなあ……」

りゅうさんは、渋々といった様子で立ち上がった都の肩に手を掛ける。すると、都の巫女装束が仄かに光り始めた。上部から徐々に光の粒子となつて大気中に消えていくのと同時に、新しい巫女装束が顔を覗かしていく。あつという間で長い時間の神技が終わる。

「そういうえば、此処はどの辺りなの？ 暖かい地下みたいだけど」

「この山は火山だからな。暖かい場所なんてちよつと探したら、直ぐに見つかるさ」

「でも、この空間は自然に出来た場所じゃないでしょ？ 大きすぎるよ」

「まあ、な。ここは力で空間を固定しているからな。都がやってくる前までここに引き籠つて居たんだ」

「……なにそれ。やつぱりあの時もりゅうさんは何も悪い事してないなかつたんじゃない！」

「お前には「待った！」な、なんだ？」

「私はこれで良かったの。りゅうさんにあえたから。もしも、あの時に戻つて贄の話が無かつたとしても周りの大人達を焚きつけて、ぜつつたいたいに戻つて来てやるんだから！」

「その時は都のせいで、また冤罪被害に遭うんだが？」

「私がりゅうさんの下に来れない事に比べたら些細な事よ」
りゅうさんが笑いながら問うと、都は些細な事だ。と胸に手を当てながら言い切る。聽て二人は笑い始めた。

「さて、じゃあツケの清算をしてもらう為に行つてくる」

「ツケ？」

「最近麓を騒がしていたのは、大妖怪サマの下の下級妖怪共の仕業だったみたいだからな」

「やつぱり謂れの無い罪で叩かれるのは嫌？」

「どちらかと言うと、表立って助けた方が評価変わるかな。って打算だな。山を、都との生活を騒がせずに過ごしたいからな」

「……もしかして、その大妖怪を退治するのつて余裕？」

「姿を見せなければ、な。ただ、姿を見せるなら力の準備の隙が無いだろうからなあ。それに、恐怖の時間が長ければ長いほど有難みが増すだろうから、蛇らしくゆつくりと狡猾に仕留めさせてもらうとするよ」

りゅうさんは悪そうな笑みを顔に浮かばせて言った。

山頂に戻つてくると、麓の町が燃えているのが良く見えた。例の大妖怪は未だ上空にいる。空から落ちていている黒ゴマに見えるモノは、何も力が感じられない空間から現出している事と感じる妖気から大妖怪の手駒達だろうと推測できた。

「じゃあ、殲滅？ 始めるかね」

りゅうさんは本来の姿に戻ると全長の四分の一ほどを起こした。すると麓の人間達の騒ぎが激しくなるのが分かった。そして、妖怪達も驚きを隠せずにいた。ただ大妖怪だけを除いて。

知つていながらこの町を襲う。それほどこの町の破壊が重要なのか、此方へ対しての宣戦布告の代わりなのか。りゅうさんはそれを判断する術を持ち得ていないので取り敢えず蹂躪を始めようとすると、隣の雄岳でりゅうさんが居竦むほどの神力が発せられる。りゅうさんが嫌な予感を感じていると、何者かがりゅうさんの身体を猛スピードで駆け上がってくる。その者は、りゅうさんの頭蓋を踏み台にして跳び、目の前にやつて来た。

目の前で宙に浮いている少女にりゅうさんは珍しくドスの効いた声で話しかける。

「おい。豊布ウ……。なに勝手に都の体を使っているんだ？」

「だって、あんなに面白そうなコトやっているのに参加しない
 選択肢が私の中に存在するはずが無いじゃない！でも、
 刀身であの場に出るのは恰好が悪いじゃない？そこら辺の
 人間は私の力に耐えられずに死んでしまおうし。その点、
 この子は幼い頃から多少毛色が違うとはいえアナタの神力を
 直ぐ側で浴び続けているし、服として身に纏っていたから
 私が入って死ぬことは無い。完璧じゃない！」
 どかが完璧なのかりゅうさんには分からなかったが、

相手が一度決めるとそう止まらない事を、身をもって学んでいる
 ので、説得して都の体から追い出すよりも妖怪達をサツと

片付けた方が結果的には都の体への負担が小さいだろうと考えた。

「はあ。分かった。じゃあ上のを頼めるか？」

「モチロン！私の使い方分かってるね。」

「これだけ一緒にいるとな」

もしも、下の手駒達の相手を頼んでも喜んで引き受けてくれる
 だろうが、その場合は戦闘が終わっても都の体を返して貰えない
 可能性がある。彼女は無意識に強敵を求めているので、本人には
 理由が分からないが心にモヤモヤしたモノが残るのだという。

そんな状態で都の体からこの神が出て行くとは到底思わなかった。

りゅうさんが山を下り、豊布都霊神が空を翔ようとした時、

町の一番高い建物を上限に幾何学模様を描かれた黄色い透明な膜
 が張られた。

「こいつは……」

「土地神サマ。だね……」

普段あまり関わりがなく、ドライな性格をしている者からの
 思わぬ援護に戸惑う二神。しかし、ある物は遠慮なしに使って
 しまえ精神の二神は、気を取り直して韋駄天もかくやとばかりに
 飛び出した。

りゅうさんは、現出した直後の下級妖怪を喰らい、身体を

喰らせ中級、上級妖怪も潰していく。幸いにも下級妖怪最強と
 うたわれるアレがいなかった様で想像よりかは楽に殲滅が進ん
 でいた。

問題は、豊布都霊神の方。豊布都霊神。またの名を武雷神。
 その名は全国に知れ渡り、信仰がものを言う神力はトップクラ
 スだ。一瞬にしてこちら一帯を焦土と化すのは余裕だろう。

しかし、刀身のまま参戦していたなら未だしも、人間の体を
 借りている今その力を引き出そうとするだけで、この体は壊れるだ
 ろう。しかし、目の前にいる相手に体の安全を第一に

考えていたら勝てないだろう。そこで武雷神は思い切って一厘
 にも満たないが、力を引き出す。それがこの体の限界一歩手前
 だと感じたから。ほんの少しとはいえ、力を取り戻した武雷神
 の発する神力は跳ね上がり、羽衣のようなものが現れる。手に
 携えるは自分自身、武雷神だ。武具の神は力の一部を使って、
 その力に値する自身の複製を顕現させるが、武雷神の様に、
 勝手に羽衣等が出てくるのは稀である。りゅうさんの怒号が
 聞こえるが気にしない方向で。

武雷神が力を引き出した事に直ぐに気付いたりゅうさんは、
 武雷神に叫び、より動きが荒れ、正に町人達が言っていた魔物
 に近くなっていた。が、当の本人達は、初めこそ恐れ、絶望
 したものの、自分達を守る様に表れた膜は妖怪の侵入を防ぎ、既
 中にいた妖怪を外に追い出すもの。という事に気付き、自分達が魔
 物と恐れ、襲ったのにも関わらず、身を挺して自分達を守ってくれ
 ている。と考えた町人達は最大限の敬意を込めてりゅうさんのこと
 をこう呼んだ。

竜王。

—— 神蛇大王 ——

と。

了

竜と少女の邂逅

しゅう

恐ろしい魔物が跋扈する世界。木々が生い茂る一面の森林の上を、一つの黒い影が飛行していた。

黒いウロコが流れるような身体を覆い、背中からは翼が一對生えている。縦に裂ける鋭い瞳孔に、少し触れただけで切れてしまいそうな牙。頭からよきつと出た角が、威圧感をより増幅させている。

爬虫類的なその見た目から、竜であることがすぐに分かる。

風を切り、巨体にも関わらず、ものすごいスピードで空を泳ぐ様は、遠くから見ても圧巻である。空の王者、といっても過言ではない。

この日、竜は食料を探すため空を舞っていた。雑食なので、美味しいものであればなんでも食べる。ただ、身体が大きいため、必要な量がやはり多い。だから、定期的にこのような食材探しをする必要があるのだ。

今日は収穫が少ない。そう思ったときだった。竜は突然、なにかに気がついた。食料ではない。地上の木々の隙間に、見慣れない物体を発見したからだ。

白色の布で包まれたなにか。明らかに、誰かが意図的に置いたものだ。土の上に横たわるように倒れるそれは、一面の緑色の中でよく目立っていた。

なんだろう。竜は、単純に気になった。このような物が森の中に落ちていることは、滅多にない。誰かの忘れ物か、誰かが捨てたゴミか。どちらにせよ、面白そうであることに間違いはない。

竜は、ほぼ興味本位で近づいてみることにした。高度を落とし地面に着陸すると、若干遠くからその物体を見つめる。横は一メートルより少し長いくらい。そして、ある程度の厚さを持っている。

もしかして、布に何かが包まれている？

ますます気になった竜は、ゆつくりとその物体に歩み寄る。警戒はしつつも、その物体がなんなのか興味津々である。

そして、段々近づくと、その物体がなんなのか分かった。

——人であった。

それも少女だ。歳は十歳か、それより下か。栗毛の髪の毛をぐしゃぐしゃにして、白い布でぎゅうぎゅうに包まれ、そして縛られている。眠っているのか、気絶しているのか、竜が近づいても目は開けなかった。四肢は固定され、周り見えないように目隠しされている。また、口には布がばんばん詰められた上に、別の布を更にも口にかませていた。猿ぐつわそのもので、喋ることは不可能に見えた。少女にながら起こったのかはわからなかったが、少なくともただならぬ状況ということは確かだ。

確実に、このままでは死んでしまう。自分とは違う生き物だけど、そんなことは至って簡単に理解できた。

竜にとつて、この少女がどうなろうと全く関係ない。少女が死ぬのと生きようと、竜にとつては痛くも痒くもないからだ。けれど、竜はなぜか少女を放っておかなかった。どこにも、メリツトなんてないのに。

竜は少女を傷付けないように、爪で慎重に布を破り切る。鋭く尖ったそれは、布に浅く刺さり、ビリビリと裂いた。そして竜は、少女を背中に乗せたあと、落とさないように、ゆつくりと慎重に翼を上下させる。不安定な少女を絶対落とさないよう、普段よりもバランスを取りながら、かなり遅く飛んだ。

しばらくして、竜は少女を連れたまま、山間の洞穴へとたどり着いた。ここが、住処である。ごつごつとした岩で覆われた、それなりに広い空間。まるで地下のように、空気はひんやりとしている。地面には、寝床として使用しているのであろう、ちよつとした窪みがある。

竜はまず、少女を地面にそつと寝かせた。なるべく痛くないように、平坦なところを選んだ。

とりあえずは、これで大丈夫。あとは目覚めるのを待とう。竜はそう納得し、自分もその窪みに身体を丸めた。

数時間ほど経って、少女は目覚めた。

少女は、自分のおかれている状況が理解できなかった。周りを見渡すと、目の前に大きな生物がいるのだから。

いわずもがな、その大きな生物というのは、少女自身をここまで運んできた竜なのだが、そんなことを少女が知る由(よし)もない。ただ少女の中では、驚くという感情以前に、なぜ自分がここにいるのだろうかという疑問のほうが勝っていた。

とにかく、ここから出よう。再び辺りを見回し、その大きな生き物が眠っていることを確認すると、少女は立ち上がった。

そつと、起こさないように。そろりそろりと、穴の外へと歩む。

しかし、僅かな物音に気がついたのだろうか。竜は、ゆっくりと首を上げると、少女を見つめた。思わず、少女は凍りついたように動きを止める。

ぎろり。

少女は、息を呑んだ。鋭く、刺すような眼差しだった。まるで、自分のことを異物とみなしているように。

殺される。私は、ここで死ぬんだ。もう、行きては帰れないんだと、少女は覚悟していた。

ところが、少女の予想に反し、竜は一切襲いかからなかった。というか、少女の存在をあまり気にしていないようにも見えた。

絶対に死ぬ、と覚悟していたのに、再び昼寝をしてみました。竜は拍子抜けした。

あの覚悟はどこへやら、固結びになった糸が一気にほどけるように、少女の中の緊張はあつという間に消えた。

そのせいだろうか、少女のお腹がなったのは、数秒後のことだった。少女を無視して寝ていた竜は、その間抜けた音で目を覚ました。

一瞬、少女の目を見た後に、立ち上がる竜。そして、翼を大きく広げると、日が暮れて薄暗くなった空へと、再び飛び出した。急な行動に、呆氣にとられた少女。

ただ一つ言えることは、竜は敵対しなかったということだ。ここで逃げ出しても良かったのだが、少女は岩場に座って竜のことを待っていた。

三十分ほど経って、竜はやはり戻ってきた。それと同時に、洞穴中にバキバキという音が反響した。

竜が爪を使って運んできたのは、馬車の荷台。馬と車を繋いでいたロープは千切れ、木でできた荷台の天井は、ぐにやりとひしゃげていた。まるで事故でも起こして、横転したかのようだった。しかし、荷台の中からは芳しい香りが漂ってくる。美味しそうなその匂いが、少女の食欲をそそる。

荷台を開けてみると、そこには干し肉のような保存食が大量に収められていた。

そう、この馬車は、お腹の空いた少女のため、竜が道端でかっぱらってきたものだった。少々強引かもしれないが、竜にとつてそんなことは関係ない。

少女は、干し肉の一つを手取る。それをしばらくじつと見つめると、思いつき口に放り込んだ。噛んでいくと、徐々に味が溢れだす。水分はあまり含まれていないが、唾液でどんどん味が舌に染み込んでいく。布に包められていたせいでできなかった、久しぶりの食事。保存食だから味は二の次のはずだが、少女にとって、人生で一番美味しいものに感じられた。

少女は、もしやもしやと次々に消費していく。竜は、若干呆れた様子で、傍から見守っていた。そうして気付いた頃には、十数個もの干し肉が食べられていたのだった。

※

少女と竜の邂逅(かいこう)から、数日が経ったある朝。

森では、雨が降っていた。霧が辺りを覆い隠し、景色を白く染め上げている。竜と少女は洞穴の中でじつとして、外の天気を憂鬱げに見つめていた。

あれから、二人……いや、一人と一匹は、空をひとつ飛びしたり、二台目の馬車を強奪してきたりと、なんやかんやで仲良く過ごしていた。もうそこには、種族間の柵(しがらみ)なんてなかった。

しかし、この日の昼頃。人なんて確実に来ないであろう洞穴に、来客があった。

「覚悟しろ、竜！」

若い男の声だった。その声の方を見れば、四人の人在る。三人が男性、一人が女性。全員が格好は違うものの、何らかの武装をしている。その容姿、そして発言から、竜を討伐しようとしていることは明らかであった。

「女の子がいる！」

竜の隣にいた少女の存在に気がついたのは、そのうちの女性だった。どうやら、竜が少女を攫(さら)ってきたと勘違いしているようだ。実際は、助けただけだ。

しかし、状況からそんなことがわかるはずもない。

四人の感情はさらにヒートアップしていく。この四人からすれば、竜は、少女を誘拐した極悪非道な怪物。そんな相手に、慈悲などにかけるわけがなかった。

「くらえッ！」

一番後ろにいる男性が、矢を射た。牽制の一発だ。放物線を描き、高速で竜に迫った矢は、体に突き刺さる。痛みから竜は、今まで聞いたことのない大ききで咆哮(ほうこう)した。

竜は案の定怒ったが、攻撃を仕掛ける前に少女が先に行動して

いた。

「どうしたの、大丈夫!？」

少女は竜の元から離れると、四人のもとへと走り出した。攻撃を止めさせるためだ。そうして、四人のうちの女性に抱きつくこと、そのまま泣き始めた。

少女にとって、竜はかけがえのない存在になっていた。

彼女の住んでいた村には、生贄の悪習があった。不慮の事故を『神の怒り』として、それを鎮めるために、若い女を捧げ物として捕まえていたのだ。

あくる日、村の男が惨殺されるという事件があった。更に不幸が重なり、少女は贄として選ばれてしまったのだ。

半ば誘拐のように、布でぐるぐる巻にされる少女。逃げようと暴れたが、成人した男相手に敵うはずもなかった。生まれ育った村の風習だからこそ、誰も助けてくれない。そんな恐怖と絶望を感じながら、少女は森の中へ放り出されたのだ。

そこで出会ったのが、竜だった。まるで、鳥の刷り込みのように。言葉は通じなくとも、自分を大切にしてくれる存在に、とても感激した。

そんな相手を、今、この人たちが殺そうとしているのだ。放置できるはずがなかった。

「おい、お嬢ちゃん逃げろ。俺達がいいつを倒す！」

少女はぶんぶんと首を振る。絶対に攻撃させまいと、自分なりに抵抗していた。

「邪魔だ！ 早く逃げろんだ！」

やっぱり少女は首をぶんぶん振る。絶対に抱きついた手を離そうとは思わなかった。

そんな少女に、女性は優しく語りかけた。

「ねえ、私達はあなたのことを……守りたい。怪我させたくない。だからお願い……私達には構わず、逃げて！」

そんな様子を、竜は至極冷静に見ていた。

自分を守ろうとしている少女と、少女を守りたいがために自分を攻撃する四人。自己中心的に考えれば、四人を倒すべきだろう。それが最善に思えた。

でも……でも、それでは少女のためにならないかもしれない。彼女のことを思っている彼らを、本当に殺してもいいのだろうか。

少女の事情は知らないが、まともではないことは確かだ。だからこそ、竜が人間の子供を養っていて良いのだろうか。いや、良いはずがない。

でも彼らなら？ 正義感のある彼らなら、ひとりぼっちの少女を放っておけるはずがない。

だからこそ。だからこそ、少女のことを考えるのならば。少女がこれから幸せになれるのであれば。

「おい、急に暴れだしたぞ！」

竜は、むちゃくちゃに暴れた……ふりをした。誰ひとりとして傷つかないように。大声で吠えて、岩場を殴り壊し、炎を吐いた。とにかく、自分が悪役と見られるように専念した。

ひとしきり暴れた後、少女の方を一瞬見る。短い間だったけど、

少女は悲しそうな顔をしていたが、竜と目が合った瞬間、驚いた表情に変わった。たぶんだが、少女も察したのだろう。

でも竜はそんなことには気を留めず、悪役に徹したまま、少女から逃げるように飛び上がった。風と雨が気持ちいい。

これでよかったんだ。あの少女は、これからきつと、幸せになるだろう。そう言い聞かせ続ける。

ただ妙に清々しい気持ちのまま、雨の空を駆け巡る。どこまでも、どこまでも。竜は、飛び続けた。

それから、竜が洞穴に戻ってくることは二度と無かった。
了

悪夢の救済

如月 吟

誰もいない町を、僕は走る。誰もいない道を、僕は走る。どうして？ どうして僕は走っているの？ 走っている理由なんて、わからない。ただ理由もなく走る。走る。ずっと走り続けていると、人の声が聞こえてきた。笑う声、泣く声、困惑の声、喋り声。たくさんの方が聞こえてくる。そして……。

目覚ましの音が鳴り響いていた。ジリリリッと大きな音を立てて鳴らせていた。

「…起きなきゃ」

朝ご飯を作ってくれる人なんていない。朝起こしてくれる人も、挨拶してくれる人も。だから、僕はいつも身支度をして、朝ご飯を作る。いつものことだから慣れている。今日はパンにしようかな。

二時間後、家を出て学校に行った。通学路にはたくさんの方が歩いていて。目の前を走っている人も。彼は日直なのかな？

「おっはよう！」

背中を誰かに押された。誰かと言っても、声からして友人なのは分かっていたけど。

「おはよう」

「相変わらず、お硬いねー」

「……宿題」

「すいませんでした」

いつものやり取りだ。というか、宿題して来いよ。また赤点取るぞ。いつもの朝、いつもの言動、いつもの友人。本当に変わらない毎日だ。本当に変わらない。いつもの夢も変わってくれない。

放課後、今朝の友人に誘われてファーストフード店に来ていた。

「最近、変な夢を見るんだけど」

友人に相談してみた。食いつくとわかりきっているけど。

「うん？ どんな？」

「……真つ暗な夜道をひたすら走ってる。それで、景色が見えなくなって、音が響いてるからトンネルにも入ったと思う。で、トンネルの先からいろんな人たちの声が聞こえてきて、終わり」

「……確かに変な夢だけども、何かもつとないの？」

「……何かって？」

「何かって言ったら、……何かよ！」

何だそれ。食いついたけど、何それ。具体的に言ってくれないとわからないんだけどな。

「何かか……」

一応考えてみる。相談してもらっている身だし。

「……あ。」

「何かあった？」

「呼吸の仕方」

「うん？ ドユコト？」

「走る時の息のリズムが違った。後、走り方も若干」

言い終わると、友人は探偵のような格好で考え始めた。うーんって声も出ている。恥ずかしくないのか？ 周りの視線が気にならないのか？ 僕は恥ずかしい。

「……誰かが助けを求めている、とか？」

「誰かって、誰？」

「さあ？」

「じゃあ、対処法とかは？」

「うーん。いつもと違うことをしてみるとかは？」

「それ、対処法？」

「いや、違うけど」

これ、大丈夫なのかな……。

暗闇に包まれた町を僕は走る。ああ、またこの夢か。たしか、いつもと違うことをしてみたらって言ってたけど、どうしよう。

「……マ……サイ」

うん？ 後ろから声が聞こえた様な。

「……マチ……サイ」

えっと、物凄く不気味で冷や汗が止まらなくなるんだけど。

「マチナサイ、マチナサイ、マチナサイ！」

僕のことを追いかけてる？ でも、どうして？ 取敢えず、この角を左に、次の角を右に、その先の公園にあるジャングルジムへ！

……あれ、どうして公園までの道、覚えてるんだろう？

ジャングルジムはドーム型の形状で、中の様子を外からは窺えない。僕はそつとジャングルジムから追いかけていた人？ を見た。

「……っ！」

追いかけていたのは、包丁を握った幼馴染の母親だった。

今日も放課後にいつもの店で友人と二人。

「朝から元気なかったけど、どうかした？」

「……」

「もしかして、夢のこと、とか」

「……お前の仮説、あつてた」

「うん？」

「誰かが助けを求めてるって仮説」

「へー。……えっ、嘘！」

「嘘じゃない、相手は僕の幼馴染だ」

僕は昨日の夢について話した。あまりに突然な話だから信じられないと思うけど。でも、急がないと取り返しがつかなくなる。そんな気がする。幼馴染が殺されてしまうかもしれない。実の母親に。そんな考えが頭の中をぐるぐるとまわっていた。

「明日って何曜日だったけ？」

「……土曜日」

「なら、お前の地元に行こう」

「え？」

「明日、土曜日だし。その夢の内容だと早い方が良いし」

「いや、だって、夢だし」

「夢でも、何か感じたから深刻そうな顔をしてたんだろう。なら、行つて確かめてみたら良いじゃん」

普段は馬鹿ばっかしている友人だけこの時ばかりは頼もしく思えた。普段は人の宿題を写してばっかの馬鹿だけど。それでも、友人のこの言葉は嬉しかった。

私の望みは、暴力を振るわれないこと、暴言を吐かれないこと、そして笑顔でいること。昔は母さんも父さんも優しくかった。怪我をしても大丈夫か聞いてくれた。よく偉いと褒めてくれた。二人も笑顔でいてくれた。いつからだろう、父さんが帰つてこなくなつたのは。いつからだろう、母さんが笑わなくなつたのは。いつからだろう、暴力を振るわれて罵詈雑言の嵐を受け始めたのは。

「あなたのせいで、あなたのせいであの人は帰つてこないんだ！」
やめて、髪の毛を引っ張らないで！

「あなたのせいであの人が捨てられたんだ！」

痛い！ お願ひ、止めて！ 叩かないで！

「私が不幸なのは、あなたのせいだ！ あんたなんて産まなきゃ良かったんだ！」

止めて、母さん！ 止めて！

今日も母さんはヒステリックに喚き散らす。今日も母さんは私に暴力を振るう。誰か、私を、助けて……。

昼過ぎに出発してから現在夕方。

「こつて、こんな遠いなんだな」

「だから引越したんだよ」

あたりは暗くなりかけており、人通りは全くなかった。夢の通りだ。

「人、全然いないな」

「そうだね」

「何か、怖いな」

「……うん」

街灯は点々とあつた。でも、逢魔が時だからだろうか。物凄く不気

味だった。生活音が全くではないがしなかつた。住宅地だからか割

りと新しい家が多かつた。

「……早く行こう」

「そうだな」

早く行かなければ。

今日の母さんは機嫌が良かった。今日は今朝から暴力を振るわれていない。いつもは私がしている家事を今日は母さんもしている。ものすごく嬉しい。嬉しいはずなのに、違和感もある。

「か、母さん。何か、良いことでもあつた？」

気になつたので、直接聞くことにした。夕暮れ時のことだった。

「今日、貴方がいなくなるの。とつても嬉しいわ。」

母さんは狂気を含んだ笑みを浮かべて、包丁を持ちながらこちらに向かつて来た。

着いたは良いんだが、どうすればよいのか迷っていた。

「……着いたな」

「そうだね」

「どうする？」

「どうつて、インターホン押すしかないじゃん」

インターホンを押して、応答を待っていると玄関の扉が開いた。中からは夢とは違う穏やかな笑顔を浮かべた幼馴染に母親が出てきた。ただ、その笑顔からは違和を感じた。狂気のようなものを感じた。

「あらあら、久しぶりじゃない」

「お久しぶりです」

「そちらの方はどなた？」

「彼の友人のものです」

「あら、そう。それで今日は」

彼女が用件を聞こうとした時、叫び声が聞こえた。切羽詰まつた、叫び声か。

「誰か、誰か私を助けて！」

驚いた。大声が突然聞こえたから驚いたわけじゃない。彼女が背後から包丁を構えたから驚いた。

「うふふ。ばれちやつたのなら、貴方たちもヤラナイといけないわね」

狂気を含んだ笑みを浮かべて、包丁を刺してきた。怖い。殺される。死ぬ。目の前が見えなくなる。純粹な恐怖しか感じなくなっていく。

「しつかりしろ！」

ハッと我に帰ると、包丁を手放し倒れている彼女と目の前で立っている友人の姿が目に入ってきた。かつこいい。

「…何したの？」

「飛び蹴りかました」

何してんだよ、助かつたけど。

「早く中に入ろう」

彼女は飛び蹴りがきれいに鳩尾へと入つたためか、気絶していた。とりあえず家の中に入ることにした。

誰かが家に入ってくる。母さんじゃない誰かかな。母さんだと、

私殺されちゃうな。

「大丈夫？」

うづくまつている私の上から声が聞こえた。その声の中には懐かしさがあつた。ああ、あの子だ。あの子が私を助けに来てくれた。私の世界は暗転した。

その後、母親は殺人未遂で警察に捕まり、幼馴染は保護された。俺達はなぜあそこに居たのか等の事情聴取を受けた。

「終わったな」

「うん、終わったね」

「……あつかなかつたな」

「でも、怖かつた」

あの事件から、二週間が過ぎた。ニュースでは流れたけど、実名等は伏せられていたためそこまで騒がれなかつた。今日は転校生が来るらしい。

「おーい、席に着け」

担任が来た。いつもより早い。

「転入生を紹介する」

入って来たのは、あの幼馴染だつた。

終

不思議で便利な古道具屋(こどうぐや) 猫にゃん

奈良県は橿原市、畝傍山(うねびやま)の麓の住宅街のあたりを、二人の少女が歩いていた。

黒髪に白い肌、小学校指定の制服にぶかぶかの鹿撃ち帽をかぶった、九歳かそこらのおとなしそうな少女が一人。

ふわふわの金髪に短パンと黒の袖無しシャツ、おしゃれなアクセサリーを身につけた、九歳かそこらのおませな少女が一人。

黒髪の方は黒曜(くよくよう)、金髪の方は黄鉄(おうてつ)と言う。

よれた紙切れを二人して覗き込みながら、少女達は足を動かしている。しかしその足取りは重く、疲労が募っていることが伺える。

「黄鉄ちゃん、本当にここであつてるの……?」

「間違いない。この辺り……のはずだ」

「ちゃんと地図見てよお……」

「見てるよ……。この辺のはずなんだがなあ……」

そもその始まりは昨日の夜、黄鉄が一枚のチラシを拾ってきたことである。チラシには、『天青堂(てんせいどう)』という古道具屋が一日アルバイトを募集している旨が書かれていた。報酬は五万円。一日アルバイトにしてはかなりの額だ。黄鉄と黒曜は諸事情からお金がなく、今日を生きるための食費すら危ぶまれる状況にある。勤務先が近い上に一日だけの仕事でそれなりのお金が手に入るこのアルバイトは、二人にとつてまたとないチャンスであった。業務内容が書かれていない事だけが気がかりであったが、逃げる準備もばっちりしてきている。危ない仕事であればすぐさま逃走を図る予定だ。

しかし、二人は今、それ以前の問題に直面している。チラシに載っている地図通りに来ているにも関わらず、『天青堂』がいつまでたつても見つからないのである。二人はかれこれ一時間ほどの時間をバイト先の搜索に費やしていた。

三十分ほど散策した時点で黄鉄は、ひよつとすると誰かに担がれ

たのではなからうかという疑念を抱いていた。しかしチラシは間違いなく黄鉄が道端で拾ってきたものであったし、担ぐ意味もわからない。諦める踏ん切りもつかず、二人は搜索を続けていた。

「……ねえ、黄鉄ちゃん。……私達、騙されてるんじゃないかなあ……」

「黒曜、それはもう私も考えた……」

もはや話す気力もない。二人は黙り込んでしばらく歩いた。

さらに五分ほどしたところで、どちらからともなく、次の角を曲がってみて見つからなければ諦めて帰ろう、という話になった。次の角を曲がった通りというのもすでに何度も通った場所であるので、要するにアルバイトを諦めたのである。

見つかりもしないものを探すことほど馬鹿馬鹿しいことも珍しい。二人が角を曲がり、いよいよ不毛な作業から解放されようとしたときのことであった。

二人の目の前に、古めかしい小屋が現れたのである。その小屋の入口には『天青堂』と書かれた木札がかけられていた。

明らかに先程までは無かった小屋の出現。黒曜は驚きのあまり声も出ない。黄鉄は驚きながらも、しかしどこかで納得していた。

天青堂、まさかただの道具屋であるはずもない。

なにせ件のアルバイト募集のチラシには、『人外に限る』との募集要項が記してあったのだ。

黄鉄と黒曜の二人は人間ではない。

黄鉄は妖狐であり、黒曜は化け猫である。だからといって別に二人は特別な存在というわけではない。奈良には妖怪の類など掃いて捨てるほどいる。黄鉄も黒曜もそのうちの一匹に過ぎない。しかし、妖怪や魔物、人外のみをアルバイトとして募集するこの古道具屋は、間違いなくかなり特別な店であった。

二人は恐る恐る、天青堂のぎしぎしと軋む戸を開け、中に入った。暗く埃っぽい店内にはいくつか棚があり、その棚の全ての段に様

々なものが乱雑に並んでいる。古い玩具であったり、本であったり、像であったり、なんにせよわけのわからないものだらけであった。

「黄鉄ちゃん……どう……？」

黄鉄は、魔力の宿った道具、いわゆるマジックアイテムの鑑定を得意としている。普通の間にはがらくたにしか見えないこの店の商品は、黄鉄の目には宝の山に見えていた。

「……すごいぞこの店。全部本物だ」

「えっ、全部……これ全部本物のマジックアイテムなの？」

「触ってみたいことにはどんな効能があるのかまではわからないが、マジックアイテムなのは間違いないな。私も驚いたよ」

黄鉄は何気なく、一番近くの棚に置いてある人形を触ってみようとした。そこで制止が入った。

「店の商品に、勝手に触っちゃあだめだよ。にやあ？」

黄鉄が手を触れようとした棚の上、そこに一人の少女が――否、一人の女兒が立っていた。

ぐるぐるの巻き髪を隠すように深くシルクハットをかぶり、黒いマントを翻し、紳士然とした装いのその女兒は、瞳までもぐるぐるとして黒く濁っている。その瞳が黄鉄を睨みつけた。

見かけの若さに反するただならぬ経歴が、立ち振る舞いに現れていた。

「……あ、えっ……と、ご、ごめんさい……」

紳士然とした女兒に、黄鉄は完全に萎縮していた。

「いいんだよお？ そんなに怯えなくて。にやあん？」

女兒は意地の悪い笑みを浮かべた。

この女兒からけもの臭いがしないことは、黄鉄の鼻がとつくに嗅ぎとっていた。この女兒は間違いなく人間である。にもかかわらず、黄鉄は女兒を警戒し、恐れていた。ふざけているような含み笑いも、舌つらずで妙にうわづつた声も、猫の鳴き声のような不思議な発音の混ざる話し方も、彼女の不気味さと不可解さを助長する。「君たちはあ、バイト志望の子かなあ。……狐と、猫かあ。にやあ。」

悪かあないねえ」

さらに女兒は一目で黄鉄と黒曜の正体を見抜いた。黄鉄はいよいよ、これはすぐに逃げた方が良くもしれない、と考え始めていた。しかし、黒曜はそんな常識的な感覚には囚われない。

「ふわあ！ すごいすごい！ 私達のこと、どうしてわかったの？ ねえねえ！」

黒曜はトテトテと女兒の乗っている棚の下まで走ってきて、目を輝かせて女兒に話しかけた。

女兒は本棚から飛び降りて黒曜の前に着地し。

「あたしは柘榴(さくろ)だよ。山陵(みやま)柘榴(さくろ)。……にやあ。天青堂の店主さあ。君たちはバイトに来てくれたんだよねえ？ 嬉しいなあ。歓迎するよお。にやうん」と言った。

「まだ子供なのに店主なんだ。偉いね。私は黒曜。曾我(そが)の(黒曜(こくよう)だよ。よろしくね、柘榴(さくろ)ちゃん」

「よろしく、にやあん」

不気味だとか、不可解だとか、そんなものは黒曜には通用しないのである。黒曜と柘榴はまるで友達のように親しげに話しはじめた。柘榴の怪しげな所作に関わらず、雇用する側とされる側としてそれはどうなのだろうか。柘榴が気にしていないから問題ないのかもしれないが。

「にやあ、ところで、そっちの子は誰え？」

柘榴が黄鉄の方を見た。目が合うとやはり背筋に悪寒が走る。黄鉄は一刻も早く柘榴から離れたい気持ちでいつぱいだった。

「わ、私は……信太(しのた)黄鉄(おうてつ)です……」

声を震わせながら、黄鉄はなんとか言った。

「にやあ。そんなに構えなくていいのに。にやあん。とにかくまあ、バイトのほう、よろしくねえ」

「がんばろうね！黄鉄ちゃん」

黒曜がガッツポーズをして意気込みを見せる。

黄鉄は呆れながら、覚悟を決めた。楽をして利益を得るには、やはりそれなりの危険が伴うことである。

店主の怪しげな格好とは裏腹に、業務内容は至って簡単なものであった。店内のいくつかの商品を店の奥の部屋へ運び、奥の部屋からいくつかの商品を店の店頭へと置くだけである。触れただけで呪われるような危険なマジックアイテムもいくつもあり（さつき黄鉄がなんとなく触ろうとした人形がそうだった）、まるつきり安全というわけでもなかったが、しかし仕事自体は楽なものだ。

店の商品には人間には触れられないような妖怪用の呪術具もいくつか混ざっており、恐らくそれを移動させるために妖怪を雇おうとしたのだろう、という推測もたった。

しかし、それは同時に柘榴が人間であることの確たる証拠でもある。柘榴は一体何者なのか。どこからこれほど大量のマジックアイテムを仕入れてきたのか。そのことが黄鉄を大いに悩ませた。

黒曜は相変わらずそんなことは気にもかけない様子だったが、そのことも黄鉄の頭痛の種となっている。

「なあ黒曜。どうもおかしくないか」

黄鉄が柘榴に聞かれないよう耳打ちした。

「おかしいって、何が？」

よくわからない銅像のようなものを運びながら、黒曜が答える。

「いろいろだけど、そもそもあの子何者なんだ？あんな小さい子が一人でマジックアイテムを売ってるなんて、明らかにおかしいだろう」「それは確かにそうだけど……でも、柘榴ちゃんは悪い人じゃないよ」

「そうかなあ……。私はちよつと苦手だよ。何を考えてるのかわからないし、あの澀んだ瞳で見つめられると、なんだか背筋がぞくつとして気味が悪い。刃物を突きつけられてるようだ」

「あのね、黄鉄ちゃん。柘榴ちゃんのこと、悪く言わないであげてほしいな。あの子からはね、悲しい匂いと優しい匂いがするから……」

……。柘榴ちゃんは、きつといい子だよ」

黒曜が悲しそうな顔をした。

昔、まだ化け猫になる前、ただの黒猫だったころ、黒曜は人間の飼い猫だった。飼い猫として、黒曜は様々な人間と接してきた。そのせいか、黄鉄にマジックアイテムの鑑定ができるのと同じように、黒曜は人を見定めることができる。喜怒哀楽、人の感情を、黒曜は匂いとして嗅ぐことができるのだ。その能力は妖界（あやかしかい）でも珍しく、黄鉄も高く評価している。

「……まあ、黒曜がそう言うなら、そうなんだろうな。私が言ってきたよ。まだ柘榴さんのことは信用しきれないけど……柘榴さんを信用している黒曜を、私は信じる」

「……えへへ。ありがと、黄鉄ちゃん」

そうして黒曜の表情に笑顔が戻ったとき、奥の部屋から柘榴の声が聞こえた。

「にやおう。早く運んで来てよう」

二人は作業に戻った。

黄鉄には一つ、黒曜に伝え忘れていたことがあった。深読みするのであれば、それを言わせないために柘榴は二人の会話を遮ったのかも知れない。

黄鉄が伝え忘れていること。それは、さつきから二人が店の奥へと運ばされている商品が全てマジックアイテムであるのに対し、店の奥から店頭へと運ばされている商品は全てただのがらくただ、ということである。これはよくよく考えてみれば不可解なことだ。客寄せの意味でも、普通目玉商品や良い品は店頭に置き、良くないものは店の奥へとしまつて隠しておくものである。柘榴は今、その逆のことをしているのだ。

しかし、柘榴がしている行動がまるつきり間違っていると、一概には言えない。良い品を隠し、悪い品を提供することが正しくなる状況というものも存在する。黄鉄には、そんな状況の心当たりがあつ

た。つまり、治安が悪いときだ。治安が悪い場所では、防犯上悪い製品を表に出し、良い製品を隠しておく方が良い。

しかし、奈良県は全国でも治安の良い部類の県のはずである。黄鉄はあれやこれやと思案を巡らせたが、それ以上真相に近づく事はできなかった。ただ、そこはかたなく悪い予感がすることだけは確かであった。

「ありがとお。おかげでぜんぶ運び終わったよお。にゃん」

二人が全部で四時間ほどの作業を終えたとき、柘榴がそう言った。「お疲れさまだねー。私、汗かいたよ」

「お疲れさま……」

柘榴と黒曜が雑談を繰り広げている中、黄鉄は一人汗を拭いながら思案を巡らせていた。胸騒ぎが収まらないのだ。

このまま何事もなく終わってくればいい、と黄鉄は切に願った。「黄鉄ちゃん……？ 難しい顔して、どうしたの？」

「うわっ、黒曜か。驚くからいきなり話しかけないでくれ」

「あわわ……ごめんね……」

謝る黒曜。ふと見ると、さつきまで黒曜の隣にいた柘榴がいなくなっていた。

「あれ？ 柘榴さんは？」

「柘榴ちゃんなら、奥の部屋だよ。私達のお給料を取りに行ってるの」

「そうか……」

まさか逃げたりはしないと思うが……と、思案したところで、黄鉄は考えるのをやめた。

人を疑ってかかるのは良くないことだ。それに、黒曜の人を見る目は確かだ。自分はきつと、この前お金を儲けようとして失敗したせいで神経質になっているのだ、と自分に言い聞かせた。

「そう言えば、黄鉄ちゃん。奥の部屋、見た？」

黒曜がきらきらした瞳で話しかける。

「ん、いや、私は奥の部屋に入ってはないな。奥の部屋から品物を出したり入れたりするのは柘榴さんがやってくれてたし。私はそれを運んでくるだけだった」

「すごかったんだよ！ いろんなものがあって、ただの倉庫じゃなくて、博物館みたいになってたの！」

「ああ、じゃあそれはきつと『驚異の部屋(ヴァンダーカンマー)』だな」

「ヴ、ヴァンダー……？」

「そうだな、わかりやすく言うと……個人博物館、って感じかな。いろんな珍品を収集して展示するんだ。個人のだから学術的な分野は関係なくて、珍しいものなら何でも収集対象だけど。十五世紀から十八世紀あたりに、ヨーロッパの貴族を中心に流行ったんだ。財力や権力を誇示するために行われていた節もあるが、純粹にマジックアイテムとかの魅力に取り憑かれた蒐集家も多い。今でもそういうやつらを見かけることはあるぞ」

しかし、柘榴が蒐集家だとするとまた疑問が生じる。と、黄鉄は思った。

商人にとつてはマジックアイテムも希少な物も商品に過ぎないが、蒐集家にとつてはそうではない。一つ一つのアイテムに思い入れと執着がある。売ろうだなんて思わないはずなのだ。

そのとき、天青堂に来客があった。

「いらつしやいませー」

「あ、いらつしやいませ……」

黄鉄が即座に営業用の笑顔で言い、黒曜もそれに続いた。

「あれ？ 黒曜……と黄鉄じゃないか。こんなところで何してるんだ？」

店に入ってきたのは、真っ白な髪に真っ白な肌、純白のコートを身につけた少女だった。少女は名を金剛(こんごう)と言う。その正体は奈良公園に住んでいる化け鹿であり、また春日大社の神使でも

ある。外見は高校生くらいに見えるが、実際にはその何十倍もの時を生きている。

言うまでもなく、鹿は奈良でもっともえらい存在である。金剛はその奈良の鹿の中でも実質的に頂点に君臨する鹿だ。本来は一介の魍魎に過ぎない黒曜や黄鉄が口を利ける相手ではない。金剛が二人と、と言うよりは黒曜と親しくしているのは、ひとえに黒曜の幅広い交友関係、そして誰とでも仲良くなるうとする純粋な心によるものであった。黄鉄は黒曜の怖いもの知らずの物言いにいつもひやひやしている。

「このお店でアルバイトしてるの。金剛ちゃんはどうしたの？」

化け猫ごときが春日大社の神鹿をちゃん付けて呼ぶなど、到底許されない。黒曜と金剛のやり取りを何度となく見ている黄鉄でさえ、今回は震え上がった。親しくしているとはいえ立場の違いはある。

実際、黒曜も普段は金剛に敬語を使っていたはずだ。さすがにこれは馴れ馴れしすぎる。少なくとも、黄鉄が同じ口の利き方をしたならば処刑は免れまい。

「なあ黒曜、私はこれでも春日大社の神使だぞ。他の鹿たちに対しての体面というものもあるんだ」

金剛が顔をしかめたのを見て、黄鉄は軽く死を覚悟した。

「……だから、ちゃん付けて呼ぶのは二人きりの時だけにしてくれないか」

しかし、金剛は目を伏して、少し恥ずかしそうに指で髪をいじりながらそう言ったのだ。

黄鉄は金剛と黒曜の関係性に大きな疑問を抱かないでもなかったが、金剛が怒っていないと知ってひとまず安堵した。

「えへへ、そうだったね。……じゃなくて、そうでしたね。申し訳ありません、金剛さま」

「その……黒曜にちゃん付けされるのが嫌なわけじゃないからな！そこは、間違うな……！！」

「わかつてますよ。金剛さま」

二人の関係性はさておき、黄鉄はとりあえず、金剛がここに来た理由について尋ねることにした。

「……金剛様、会話を遮る非礼をお許しください。春日大社の神使であり、並び立つ者無き偉大な神鹿であらせられる金剛様が、一介の古道具屋になんのご用向きでしょうか。お聞かせ願えませんか」

黒曜との会話を遮られたことに金剛は一瞬明らかにも不機嫌になり、そしてすぐ元の調子に戻って言った。

「仰々しいな、黄鉄は」

「性分です。何卒ご容赦を」

仰々しいことがあるか、と黄鉄は心の中で呟いた。黄鉄は何も大げさな物言いなどしてはいない。これこそが、鹿に対する一介の妖怪の本來あるべき言葉遣いである。鹿はこの奈良県において最もえらいのだ。

金剛は会話を遮られたことでほんの少しだけ憤っていたが、黄鉄の丁寧な態度に怒りも霧散したようで、ようやく用件について話し始めた。

「まあ、大した用事ではないよ。しかし、黒曜にも尋ねられたし説明しておくでしょう」

そう前置きして、金剛は言った。

「この店の店主に、盗んだものを返してもらいに来たんだ」

「ぬ、盗んだ……？ 柘榴ちゃんが……？」

「この店の店主には、奈良県の北部から京都の南部にかけて、広い範囲での多数の盗難事件について関与の疑いがある。京都の鬼共に引き渡して裁判にかける予定だ」

戸惑いを隠せずにうろたえる黒曜。それをよそに、黄鉄は納得していた。全ての謎が解けたわけではなく、むしろ不明な点は山のよりに積もっている。しかしそれでも、古道具屋と言うより手段を選ばない妄執的な蒐集家と言った方が、より柘榴の人物像に近いと思っただからだ。

「柘榴ちゃん、とやらはどこにいる？」

「奥の部屋に」

混乱している黒曜に代わって、黄鉄は答えた。

金剛がつかつかと奥の部屋の扉の前まで進んでゆく。いつの間にか、奥の部屋の扉には大きな錠前が付けられていた。もしもこれが金剛の侵入を拒むためのものだとなれば、柘榴が盗難事件に関与していることはいよいよ間違いないだろう。

「……これは……『巨人(きよじん)の錠前(じょうまえ)』か」

錠前を一瞥して、金剛は言った。

『巨人の錠前』とは、北欧に伝わるマジックアイテムである。別名を『レーギヤルの錠前』と言い、北欧神話には伝説の炎剣レーヴァテインを封印する錠前として登場する。神話にその名を残すオリジナルの『巨人の錠前』は、対応する鍵以外では開かず、また破壊することも理論上不可能であるらしい。本物の行方は現代には伝わっていないものの模造品の存在は多く確認されており、北欧の由緒正しい古道具屋で札束を投げつければ入手することが可能である。今この扉に施されているものはかなり上質な模造品であるようだ、と、黄鉄は鑑定した。少なくとも、現代の人類の文明レベルで破壊を試みれば難航を極めるだろう。黄鉄が錠に気を取られていると、いつの間にか金剛の手に鹿の角を模した形状の槍が握られていた。

「ま、待って、待ってください！」

黒曜が泣きそうな顔をして、金剛にしがみつく。

「柘榴ちゃんは、悪い子じゃないんです……！ あの子の匂いは……すごく優しくて、悲しくて……悪いことをしたのかも知れないけど……けど、悪い子じゃないんです……！ だから……」

一介の妖怪に過ぎない黒曜が金剛に意見し、その行く手を妨げようとする。本来あつてはならないことだ。けれど、金剛は優しく笑って、黒曜の頭を撫でた。

「大丈夫だ、黒曜。私はお前が悲しむようなことはしない」

金剛が、黒曜の黒髪をかき混ぜるように撫でる。金剛が黒曜の頭

を撫でているときの二人の姿は、どことなく姉妹のようにも見えた。二人の容姿は似ていないが、二人の距離感はそれほどに親密だった。「んう……」

頭のとっぺんのあたりが少しぼさぼさになって、黒曜は金剛から手を離れた。

金剛は微笑んで、黒曜は両手で涙を拭った。

「黒曜、少し離れている」

そう言つて、金剛は槍をくるくると回し始める。槍の回転が黄鉄の目で追えなくなつてから十数秒すると、槍の穂先が橙色に光り始めた。槍はもう目で終える速度ではないため、橙色の光だけが繋がつて大きな天使の輪か何かのように見える。それはそれは神々しい光景であった。

衛星や隕石が大気圏に突入するときのように、空気との摩擦によつて槍の穂先が発熱して発光しているのだ、と、黄鉄は考えた。実際の発熱の原因は摩擦よりも空気の断熱圧縮によるところが大きい。ため、半分正解で半分不正解といったところだろう。いずれにせよ、もうすぐ放たれる金剛の一撃に隕石並の威力があることには疑いの余地もない。

そしてそれから数秒後、金剛の槍が一閃した。

黄鉄と黒曜は轟音と衝撃に備えていたが、音はほとんど無かつた。錠前も扉も瞬時に溶解したからだ。衝撃も予想していたほどではなかつたが、元がぼろつちい天青堂はあわや倒壊するところであつたし、黄鉄は尻尾と耳が出てしまい、黒曜の変化は解けてしまった。攻撃が一応は錠前を狙つた局所的なものであつたため、幸運にも吹き飛ばされたりするものはなかつた。

「……！」

そして、金剛は目に驚愕の色を浮かべた。

壁に開いた大穴の向こうには、何も無かつたのだ。

金剛は黒猫の姿に戻つてしまった黒曜を拾い上げ、胸元で抱えた。

「大丈夫か黒曜。すまなかったな」

「だ……大丈夫……。ありがとう……」

黒曜は目を回しながら言った。

「にしても……何も無いな……」

金剛が呟いた。

金剛の攻撃の威力が高すぎたため全てが跡形もなく消えた、わけではない。その場合も何らかの痕跡は残るはずだし、金剛もそうならないように手加減している。なんの跡形もなく、まるで元からここに部屋なんて無かったかのように消え失せているのである。

「……逃げられたな」

金剛が言った。

トリックはわからないが……というより、あれほど上質の『巨人の錠前』を手に入れられ、そして今回のように使い捨てることのできる人間が犯人であることを考慮すると、この程度のことが可能なのマジックアイテムや魔術、霊術などにはありすぎて特定できないのだが……何にせよ、部屋ごと逃げられたようだ。恐らく、柘榴は最初からこれを見越していたのだろう。

「……お友達になれたと……思ったのにな……」

ぼつりとそう漏らした黒曜を、金剛はぎゅつと抱きしめた。

「大丈夫だ。私がいる」

きつとまた会える。金剛はそう付け足した。

「……バイト代……欲しかった……」

黒曜はまたぼつりと漏らした。全く凶太いやつだ、と黄鉄は思った。

「今日の夕飯くらいなら食わせてやるさ。化けなおせるか？」

「……うん」

黒曜が金剛の腕の中で化けなおすと、ちょうど金剛が黒曜をお姫様抱っこしているような体勢になった。

「黄鉄、お前はとうする？一緒に食べに来るか？」

抱き抱えた黒曜を立てさせてやりながら、金剛が言った。

金剛と一緒に食べたなら、どんなに良い料理も味わうどころじゃないだろう。とは思ったものの、黄鉄は神鹿からの直接の誘いを断るほどの命知らずではない。

「黄鉄ちゃん、一緒に行こう？」

黒曜のその言葉もあり、結局黄鉄も一緒にどこかへ食べに行くことになった。

半日働いて、これだけ気を使って、報酬がその日の夕飯だけだなんて、全く割に合わない。

割に合わない、割に合わない。

黄鉄は心の中でそう呟いて、ため息をついて、それから微笑んだ。そして、せめて夕飯はたっぷり楽しんでやろうと決意した。

黒曜と黄鉄の、一攫千金を狙う挑戦は続く。

(つづく)

ねことぎつねとあかいさかな

猫にゃん

奈良は橿原の神宮に、深田(ふかだ)池(いけ)という池がある。深田池は四季折々に景観を変える素晴らしい池であり、昔から周辺住人の憩いの場となっていた。

丑三つ時、その池のほとりを駆け抜ける一人の少女がいた。少女の身長は四尺半(百三十六センチメートル)ほどで、真つ白な半袖のシャツと真つ黒な吊りスカート、そしてぶかぶかの鹿撃ち帽を身につけている。少女の肌は生まれたての赤ん坊のように白く、その黒髪は夜によく馴染んだ。齢は九つくらいだろう。少女は明らかに小学生に見えるその体躯に、不釣り合いなほど大きな風呂敷を背負っていた。膨れ上がったその中にはいろいろな物が詰まっているようだ。少女はきよきよと辺りを見回し、誰もいないことをしつこく確認してから、深田池のほとり、長山(ながやま)稲荷(いなり)神社(じんじや)へと入っていった。

昼間の喧騒をよそに、夜の長山稲荷は静まり返っている。蟬共が所構わず賑やかす季節にはまだ少し早い。稲荷社の専売特許たる数え切れない朱色の鳥居。それを少女は次々にくぐり抜け、白熱電球にぼんやりと照らされる本殿の地べたにちよこんと座り込んだ。

「黄鉄(おうてつ)ちゃん」

鈴の鳴るような声でそう呟いて、少女はまたきよきよとあたりを見回した。少女は伏し目がちで、なにか後ろめたいことがある様子だった。しばらくしても何も起こらないので、少女はもう一度、先ほどより少しだけ大きな声で言った。

「黄鉄ちゃん」

そのとき、本殿の屋根から少女の目の前に、黄金(こがね)色(いろ)のもふもふが降ってきた。もふもふはくるくる回りながらふわふわと落ちてきて、ぼすつと着地した。もふもふから手足が生え、尻尾が生

え、狐の頭と耳が生えた。もふもふの正体は丸まった狐だったのがある。狐は尻尾を左右に振ると、たちまち人間に化した。黄金色の髪をなびかせ黄金色の瞳をした、九つくらいの歳の少女に。

黄金色の少女に化したこの女狐は、名を黄鉄(おうてつ)と言う。その毛並みの色合いから名付けられたのだ。

「久々(くく)だな。黒曜(くよう)」

黄鉄(おうてつ)が言った。黒曜(くよう)とは黒髪の方の少女の名だ。黒髪の少女の正体は化け猫であり、その真つ黒な毛並みから黒曜(くよう)と名付けられたのだ。

「うん。一週間(いっしゅうかん)ぶり……かな、黄鉄(おうてつ)ちゃん」

「そうだ。首尾(しゆび)はどうだ？」

「どうだろう……。でも、全部黄鉄(おうてつ)ちゃんの言う通りにしたよ」
自信(じゆん)なさげにそう言(い)って、黒曜(くよう)はここまで背負(せお)ってきた風呂敷(ふろしき)包(か)みを広げた。すると中(なか)から無数(むすう)のがらくた(がらくた)が現(あら)れた。これらは全て、この一週間(いっしゅうかん)で黒曜(くよう)が奈良(なら)県(けん)奈良市(ならし)、及び生駒(いごま)郡(ぐん)、つまり東大寺(とうだいじ)の辺り(へり)や法隆寺(ほつりゆうじ)の辺り(へり)を回(まわ)って盗(ぬす)んできたものである。盗(ぬす)んだと言(い)っても、実際に金庫(きんこ)破(や)りだとか強盗(きやうとう)だとかをした訳(わけ)ではなく、拾(ひろ)ってきたものが大半(たいはん)だ。

奈良(なら)の神社(じんじや)仏閣(ぶつかく)には霊験(れいげん)あらたかな場所(ばしょ)が多くあり、その周辺(しゅうへん)では不思議(ふしぎ)な力の宿(やどり)った道具(どうぐ)、いわゆるマジックアイテム(マジックアイテム)だとかアーティファクト(アーティファクト)などと呼ば(よ)ばれるものが非常に多い。黒曜(くよう)はこの一週間(いっしゅうかん)、ごみ捨て場(ごみすてば)を漁(あ)り、自動販賣機(じゆうばんばいき)の下(した)を覗(のぞ)き込み、古道具屋(こどうぐや)で万引き(まんぷき)をし、古書堂(こしょどう)で値切り(ぢきり)に値切り(ぢきり)、幾度(いくど)となく通報(つうほう)され、幾度(いくど)となく逮捕(たいぼ)されそうになりながら、そういつたマジックアイテム(マジックアイテム)を収集(しゆじゆん)してきた。

もちろん、その理由(りゆうゆ)はお金(かね)である。実は少し前に、それまで黒曜(くよう)が勝手に住(す)み着(き)いていた神社(じんじや)で耐震(たいじん)工(こう)事が始(はじ)まったのだ。これによつて黒曜(くよう)はお供(たま)え物(もの)という食料(じきりょう)供給(じききやう)を絶(た)れた。しかし、お供(たま)え物(もの)で肥(こ)えた舌(した)で今(いま)さら鼠(ねずみ)を取(と)って食(た)べる生活(せいかつ)に戻(かえ)りたくない黒曜(くよう)は、親友(せんととも)の化け狐(かきねこ)、黄鉄(おうてつ)に泣(な)きついた。そこで黄鉄(おうてつ)が提案(ていせん)したのが今回(こんかい)

の計画であった。

奈良市周辺にありふれているマジックアイテムを元手をかけずに収集し、コレクターに高値で売りつける。奈良県民はただでさえ信心深いので、奈良県にはマジックアイテムの収集家がたくさんいるのだ。奈良市に行くついでに生駒郡に立ち寄ったのは、計画にはなかった黒曜の手柄と言える。

「結構集めてきたんだな」

「うん……。多いほうがいいかと思って」

マジックアイテムの鑑定は普通の妖怪にはできない。八百万の神々の力と専門的な技術を必要とする。妖狐、つまり一応は神の使いのはしくれである黄鉄がマジックアイテムの鑑定を得意としていたことは、黒曜にとつて全く幸運なことであった。黄鉄は、黒曜が得る利益の何割かを山分けにすることを条件にマジックアイテムの鑑定を買って出てくれたのだ。

「じゃあ、早速鑑定しよう」

「ありがとう。黄鉄ちゃん」

黄鉄は適当に、一番取りやすいところにあった石を手にとった。

「おお、これはすごいな。どこで手に入れたんだ？」

「ええと、確か、法隆寺の近くの田んぼに、すごく小さな社があって……。私の腰くらいの。それで、蜘蛛の巣が張ってたし、もう長いこと誰も参拝してないみたいだったから、御神体を貰ってきたの」

黒曜が思い出しながら、身振り手振りを交えて語った。

「うーん。ちよつと危ないなこれ、レア物すぎる」

「レア物なら、いいんじゃないの？」

「基本的にはそうなんだが、しかし、奈良の方は鹿のテリトリーだからな」

実は、日本のほぼ全ての都道府県において、妖界(あやかしかい)のトップはだいたい鬼か天狗が務めている。秋田ではなまはげがトップだが、彼らは鬼の親戚だ。鬼、そして天狗、彼らは絶対的な力と知恵、そして権力を兼ね備えている、妖怪の中でも別格の存在

なのだ。しかし鬼と天狗が顔を利かせるこの国にも、わずかにそうでない場所が残っている。その一つが奈良県だ。

奈良県は鹿が治めている。

当然ながら、県を一つ治めるというのは生半ではない。天狗や鬼のように、山を吹き飛ばしたり山を持ち上げるくらいの力がなくてはならない。

あるのだ。奈良県の鹿には、その力が。

奈良県の鹿を侮るなかれ。彼らの跳躍は山を飛び越え、彼らの突進は山を突き飛ばす。全国どこか全世界でも、奈良県の鹿ほど強大な妖怪はそうそう見つかるものではない。鬼も天狗も、奈良の鹿だけは敵に回したくないと語っている。そんな鹿の領土でマジックアイテムを盗んで回るなど、もし鹿に知られば命はない。珍しく有名なものであればあるほど、盗んだことはすぐに露呈する。盗むのはなるべく高価でかつ有名でないものでなくてはならない。黒曜は割と命懸けの綱渡りをしていたので。

「あわわわ……。だ、大丈夫だよ……。大丈夫だよ……。？」

黒曜は改めて震え上がった。

「まあ、廃れた小さな社から盗んできたんなら、ばれやしないさ。それより鑑定結果だが、これは魚(うお)石(いし)だ。高い値がつくぞ」

「う、魚石……？」

両手で自分を抱いて震えを抑えながら、黒曜は言った。

「そうだ。表面が湿ってるだろ？ 拭いても拭いても水が滲み出てくる。魚石特有の性質だ」

「そ、そうなの……？」

「無教養だな、黒曜。『雲林石譜(うんりんせきふ)』という古い中国の書物に書いてあるんだが、読んだことはなさそうだな。石の専門書でなかなかいい本なんだが、それはいい。魚石って言うのは、中に魚の入った石のことだ」

「お、お魚が……入ってるの？」

「そうだ。魚石の中には水が入ってて。その中できれいな赤い魚が泳いでるんだ。耳を当ててみる」

黒曜が耳を当てると、こつ、こつ、と音が聞こえた。石の中で魚が泳いでいて、ときどき壁にぶつかっているのだ。

「……ほんとだ……すごい……」

「だろ？　そして魚石の何より素晴らしいところは高値で売れることだ。魚石を少しずつ削って磨いていくと、石が薄くなって中が透けて見えるようになる。石の中で泳ぐ魚はこの世のものとは思えないほど美しいらしい」

「いくらくらいで売れるのかな……」

「わからんが、一千万は下らんだろうな」

「いつ、いつせん……！」

「ただ、魚石はかなり割れやすい。割れて魚と水が出てしまうとただの石だ。加工に失敗する人も多いから……。絶対落とすなよ？」

「う、うん！　落とさないよ……！」

黒曜は魚石を大切に抱いた。

「よし、じゃあ次の鑑定にかかろう」

それからしばらくの間、二人は鑑定の結果に一喜し、一憂した。

それらは『ゆ』という文字だけがまばらに書かれた本であったり、文字盤の左右が反転した時計であったり、体温のある石だったり、どこか錠前に合致するのかわからない鍵だったりした。七割くらいはなんの変哲もないただのがらくただったが、三割くらいのマジックアイテムはどれもそれなりの値段で売れそうなものばかりで、黒曜も黄鉄もほくほく顔であった。さすがに魚石を超えるものは無かったが、それでもかなりの儲けである。

半分ほどの鑑定が済んだ頃の事であった。

「これもマジックアイテムだ。なかなかいい感じだな。黒曜はこういうのを見つけてくる才能があるよ」

「えへへ……ありがとう黄鉄ちゃん」

「次は……んん？」

黄鉄が手に取ったものは、直径が六寸(十八センチメートル)ほどの半球だった。半球と言っても中は空洞で、料理に使うボウルのようになっている。表面には緻密な美しい透かし彫りがなされていて、どうやら材質は銀らしい。

「……………こ、黒曜、これ、どこで拾ってきたんだ？」

黄鉄が震える声で尋ねた。

「ええ？　えつと、東大寺の辺りに行ったときに……倉庫からいろいろ、荷物を運び出しているところだったの……。だから、倉庫からちよつとだけ貰ってきたんだけど……ちよつとだけ……」

「……………！」

「あ、あの……どうしたの？　黄鉄ちゃん……？」

「……お、お前は……！　東大寺と他の寺院の区別もついてないのかっ！　これはっ！　銀薫炉(ぎんくんろ)だ……っ！」

銀薫炉とは、純銀で作られたお香を炊くための道具であり、お香を乗せるための火皿を常に水平に保つ仕掛けがある。正倉院に納められている、国にとっても極めて重要な宝物である。

勿論、そんなものを盗んでしまったからにはバレないはずがないし、奈良の屈強な鹿たちが黙っているはずもない。

「え、えつ、えつと、まじいんだよね……それって……」

「まじいなんてもんじゃない！　すぐに鹿が来るぞ！」

「し、鹿が………ご、ごめんね。ごめんね黄鉄ちゃん……私のせいで……」

黒曜はぼろぼろと泣き出した。

「別にいい！　わざとじゃないしな。それに泣いている場合じゃないぞ！　すぐに行動しないと！」

「こ、行動って、ど、どうするの……？」

「逃げるんだよ！　戦って勝てるわけないだろ！　銀薫炉は置いていくぞ！」

三十六計逃げるに如かず。黄鉄はすぐに、鑑定したものの中から

持ち運びやすく価値が高いものを厳選して風呂敷に詰め込みはじめた。

その瞬間、凄まじい衝撃が辺り一帯を襲った。

あらゆるものが吹き飛ばされ、樹木も幾本となくなぎ倒された。長山稲荷の本殿が倒壊しなかったことは全くの偶然で、不幸中の幸いであると言う他ない。

黄鉄と黒曜は驚きのあまり変化(へんげ)が解け、黄鉄はとっさに黒曜を守ろうと抱き抱えたが、二人とも吹き飛ばされてしまった。

黒曜は隕石でも降ってきたのかと悲鳴を上げたが、降ってきたのは隕石ではなく鹿である。十尺(三メートル)を超える背丈の真っ白な鹿が奈良県奈良市の奈良公園でジャンプし、同じく奈良県の橿原市橿原神宮境内長山稲荷へと稲妻の如く光り輝きながら着地したのだ。鹿の跳躍力がもはや軍事兵器の域にまで達していることは奈良県民の間では常識である。

小さなクレーターを作りながら長山稲荷へ降臨した純白の鹿は、一度激しく巨体を震わせた。すると鹿の姿は消え失せ、真っ白な髪に真っ白な肌、純白のコートを身につけた少女が立っていた。その外見は高校生くらいに見えるが、鹿の角を模した槍が右手に握られており、その立ち振る舞いは少女がただものでないことを雄弁に語っていた。奈良公園の鹿というだけあって見事な化(ば)け力(ちから)から(だ)。

「やあやあ！ 遠からん者は音にも聞け！ 近からんものは寄りて目にも見よ！ 我こそは春日大社の神使、白角(しらつの)の金剛(こんごう)である！ 正倉院の銀薫炉を盗んだ不躰者はどこだー！ー！」

少女——金剛は大声(だいいおんじょう)を上げて名乗った。しかし金剛がそう叫んだときには、すでに銀薫炉を盗んだ不躰者たちは吹き飛ばされて深田池に落ち、命からがら岸に這い上がっているところであった。

「……ふむ。どうやら私に恐れをなして逃げ出したようだな！」
誰からも返事がなかったため、金剛はそう独りごちた。それから彼女の着地による衝撃に奇跡的に無傷で耐えた銀薫炉、それと幾つかの盗まれた貴重品を回収して、満足げに奈良公園へと帰っていった。

一方その頃、深田池のほとりで吹き飛ばされた二匹のけものがたずんでいた。二匹の体はびしょ濡れである。

「……………黒曜、大丈夫か？」

しばらくの沈黙の後、黄鉄がおもむろに立ち上がり、ぶるぶると身体の水滴を飛ばしながら言った。

「……………ごめんね黄鉄ちゃん……………私のせい……………」

黄鉄の言葉を聞いて力が抜けたのか、黒曜は再び泣き出した。

「いいよ別に。土台、楽しんで儲けようっていうのが無理な話だったんだ」

「……………楽しんで儲けたかったよう……………」

「……………結構ずうずうしいよな、お前……………」

黒曜はそれからもしばらく泣き続けた。

泣き続ける黒曜に、黄鉄は魚を啜えて差し出した。

「ほら、これでも食べて、元気出せよ」

「んう……………」

黒曜はそれを口で受け取り、両前足を添えて食べた。それはそれは美しい、赤い小魚であった。

「……………美味しい」

食べ始めると黒曜が泣き止んだため、黄鉄は笑顔になった。

「そうか、よかった」

「ありがとう、黄鉄ちゃん……………このお魚、池でとったの？」

「……………いや……………魚石の中にいたやつ……………」

実は、吹き飛ばされる瞬間、黄鉄はとっさに黒曜を抱き抱えただけでなく、同時に魚石を啜っていた。魚石だけは何とんでも手放

したくなかったのだ。しかし魚石は内部に水が入っているため非常に割れやすい。金剛の着地の衝撃には何とか耐えたものの、吹き飛ばされた二人が深田池に着水する際に割れてしまっていた。そして割れた魚石の中からは色鮮やかな赤色の小魚が出てきた。伝承通りである。

「……くすん」

魚石が割れたことを悟り、黒曜はまた泣き出した。猫が魚を食べながら物悲しそうに泣くというのは、また珍しく面白いことである。

そして、黒曜と黄鉄の一攫千金を狙う挑戦は続くのであった。

（つづく？）

？

理不尽

若葉

この世界はどうしようもなく醜悪で、とてつもなく残酷だ。一粒の砂ほどしかない善と、辺りを覆うほどの悪で形成されたこの世界に、私は嫌気がさした。

「バツカじゃない？」

「自業自得でしょ」

「変なの」

なにがいけないのだろう。いや、私は悪くない。悪いのは彼らだ。

嫌だ。嫌だ。嫌だ。

みんないなくなればいいのに。

そうすれば、彼は……

————

好きだった女の子と付き合うことになった。

特筆すべき長所がないこんな僕の告白を受けてくれた彼女はとても優しくて、そして誠実だった。

成績が良くない僕に勉強を教えてくれた。放課後に色々な場所を教えてくれた。彼女の持つ世界の見方は、色褪せていた僕とは違って色とりどりで、輝かしくて尊いものに感じられた。

「世界の見方なんて、ちょっと角度を変えればすごく綺麗に見えるものよ。どんなに綺麗なステンドグラスだって、真横からじゃ何も見えないでしょ？」

いつだったか、苛められて泣いていた僕に、彼女はそう言って手を伸ばした。僕は眩しいそれを見上げ、そして掴んだ。

その瞬間、色褪せていた世界に色が付いていった。つまらないと

思っていた世界は、本当はこんなにも綺麗だった。それを教えてくれた彼女の方を見ると、笑顔で言った。

「ほらね？」

彼女と付き合いだしてから、学校が楽しみになった。昼休みが楽しみになった。放課後が楽しみになった。

そしてなにより、生きるのが楽しくなった。

彼女の笑顔は可愛らしくて、そしてとても頼もしかった。

けれど、周りはそう思わなかった。

「あんな根暗といつらくない？」

「大丈夫？」

「相談にのるよ？」

彼女の周りにいるクラスメイトは心から心配したような顔で尋ねる。それに対し彼女が

「人のことを悪く言うのはよくないよ。私が彼といたただけだから心配しないで」

と答える度に、僕のせいで彼女に迷惑がかかっていると思い、ギョツと胸が締められるような気がした。

彼女と付き合うことになってから一週間が経った。いつものよう

に僕は彼女と他愛もない話をしながら歩いていた。

「それでね、お父さんがこう言ったの。『お前には早すぎる』って。ひどいと思わない？」

「うーん、僕はその気持ちわかるな。心配しちゃうっていうか」

「もう……」

話している途中、僕は違和感を感じた。話していくうちに、彼女の顔が悲しそうになっていったのだ。

「どうかしたの？」

「え？」

「あ、いや……なんか、悲しそうだな、て」

僕の言ったことに驚いたのか、彼女は目を見開いて僕を見た。そして、それを誤魔化すように笑って言った。

「そんなことないよ！ ほら、元氣元氣！」

彼女は笑っていたが、とても元氣そうには見てなかった。

けれど、彼女に嫌われたくなかった僕はそれ以上言及しなかった。

そして、それは起きた。

「……ごめんね」

「え？」

僕は彼女に突き飛ばされた。何が起きたのか理解できなかった。

「あ」

そして、目の前が赤く染まった。

「あ……あああ！」

彼女の胸元が赤く染まっていた。血をまき散らし、彼女の体がぼたりと倒れた。

「あ……」

そして、彼女の後ろに人がいたことに気付いた。僕はその人物を知っていた。

「なんで……」

返り血で赤く染まったクラスメイトの男に怒鳴り付けた。

「どうして、彼女を刺した！」

そいつは血で濡れたナイフを持っていた。こいつが、彼女を刺したのだ。

「お前が！ お前が悪いんだ！」

そいつは僕を指差して叫んだ。

「俺はお前を殺そうとしたんだ！ それをこいつが庇ったんだ！」

そう叫ぶ彼は、荒々しい言葉とは裏腹にかなり怯えていた。足もナイフを持つ手も震えていた。

「ひっ……うわああ!!」

そして、とうとう耐えきれなくなったのかそいつは一目散に逃げ

ていった。

「……」

僕は呆然と立ち尽くすしかなかった。

「……」

彼女は僕を庇って刺された。

「……」

僕のせいだ。

「僕の、せいだ……」

ポロポロと涙が零れる。

そして、僕は……

——————

「聞いたか？ 昨日の事件」

「女の子がナイフでさされたっていうあれか」

「実はあれ、被害者も犯人もこの学校の生徒らしいぜ」

「マジかよ……」

「ああ。しかも被害者の彼氏もその場で自殺したんだってよ」

「まあ、わからんでもないが……」

「物騒だねえ……」

——————

これは、終わりのない理不尽な物語。

彼女に守られた彼は、次こそはと彼女を守る。

彼に守られた彼女は、次こそはと彼を守る。

「ふふふ」

不幸。絶望。虚無。

あなたたちの最大の不幸は、私に目をつけられたこと。さあ、その甘美な嘆きを見せて、視せて、観せて、魅せて……

この世界はどうしようもなく最低で、とてつもなく残忍だ。一粒の砂ほどしかない善と、辺りを覆うほどの悪で形成されたこの世界に、僕は嫌気がさしていた。

「気持ち悪い」

「近づかないで」

「なんで生きてんの」

なにがいけなかったのだろうか。いや、僕は悪くない。悪いのは彼らだ。

嫌だ。嫌だ。嫌だ。

みんないなくなればいいのに。

そうすれば、彼女は……

————

生まれて初めて人を好きになった。恋愛小説みたいな一目惚れなんてするはずないと思っていたけれど、まさか自分が経験するなんて思いもよらなかった。

「す……好きです、付き合ってください！」

ましてや好きな人に告白されるだなんて夢にも思っていなかった。嬉しすぎてその日の夜は眠れなかった。

しかし、その日から私は嫌な思いをすることになった。

「何か弱味でも握られたの？」

「大丈夫？」

「相談に乗るよ？」

友達だと思っていた人たちからの心ない言葉。それは私の心を傷つけていった。彼女たちが本心から心配していることがわかるのがさらに心を痛めた。

私のせいで彼が傷ついている。

そう考えただけで嫌になり、いつそ彼と一緒に逃げてしまいたいと思うようになった。

ある日の放課後。彼と一緒に帰宅しているときに、その事件は起きた。

「え？」

私の話を笑いながら聞いていた彼が、突然倒れたのだ。

「あ……」

うつ伏せに倒れた彼の背中には、ナイフが刺さっていた。赤い血が地面に広がる。彼の服にも赤い染みが広がっていた。

私は、何が起きたのかわからなかった。

「はは……ははは……」

後ろから男の笑い声が聞こえた。クラスメイトの声だった。

「お前が……お前が悪いんだ！ 彼女を不幸にする悪魔め！」

男のその言葉を聞いて、私は目の前が滲んだ。

私のせいだ……

「私の……せいだ……」

狂ったように笑う男と、群がる野次馬から意識を外し、倒れて動かなくなった彼を見た。

「……………」

彼が何かを言おうとしていた。私は慌てて彼の口元へ耳を持っていく。

「こ……は……まも……た……」

今度は守れた。

彼は確かにそう言った。その顔は痛みなんて感じてないようなほど幸せそうだった。

「つ！」

私は彼を抱きしめた。そして、泣きじやくりながらなんとか言葉を紡いだ。

「ごめん……なさい……!」
そして、私は意識を失った。

—— ——— ———

「聞いたか？ 昨日の事件」

「男の子がナイフでさされたっていうあれか」

「実はあれ、被害者も犯人もこの学校の生徒らしいぜ」

「マジかよ……」

「ああ。しかも被害者の彼女もその場で自殺したんだってよ」

「まあ、わからなくてもないが……」

「物騒だねえ……」

—— ——— ———

理不尽は突然に訪れる。

彼はこれからも彼女を守り続け、彼女もまた彼を守り続けることになる。それは決して終わることなく繰り返される。

なぜ彼らはこのような目に遭うのか。それは単に人理を越えた者による理不尽。人類には決して抗いようのない災害のようなものがある。

理不尽とは突然に訪れる。

上位者による理不尽に対抗する手段などない。人間は蟻をいつても潰せるが、潰される蟻は理不尽な扱いを受ける。今回はその人間が神あるいは悪魔で、蟻が人間だったというだけの話。

了

恋愛勘定

えのぐふで

目が覚めるとそこは、小さな部屋だった。

コンクリートに囲まれ、一つの机と一つのイス、そして一つの小さなスピーカーだけが置かれている。あとは扉があるくらいで、驚くほど無機質で、面白くない部屋だった。

どうして自分がここにいるのか、俺にはさっぱり分かっていない。ただ、ここに来る直前（時計もないので、実際に直前かどうかは分からないが）に、誰かに襲われ、意識が無くなったという事だけは覚えていて。

誘拐。監禁。脅迫。拷問。

いくつかのワードが頭をよぎると、背筋が凍るような感覚がした。だが、今の俺は縛られているわけではないし、麻袋を被せられているわけでもない。そういうものとは程遠いような状態だ。

ならばなぜ、俺はここにいるのか？ たった一人の部屋の中で、思っただけが歩き回っていた。

「……くそつ、せつかく今日は——」

ガチャ、と。

不意に扉に手をかける音が響いた。

「……誰だ？」

ギイ、と。

ゆつくりと扉を開けて部屋に入ってきたその人物は、清潔感の漂う執事服に身を包んでいた。見たところ、六十代半ばほどだろうか。彼は俺を見ると、薄く微笑んでこう言った。

「初めまして。本日はようこそおいでくださいました」

「……おいでくださいました、だって？ ふざけんな、俺は無理やり連れてこられたんだよ」

「おやおや、相当気がたっている様子ですな。まあ、それもそうでしょう。急にこんな場所に連れられたのですから。少々手荒な真似

をしてしまい、申し訳ございません」

男は、深々と俺に頭を下げた。それは謝罪の意味だけでなく、自分がこの俺を連れ去った張本人だ、と認めている証でもあった。だが、こんな老齢の男一人で、俺をどうにかしたとは思えない。

「俺を連れ去ったのは、どんなグループだ？ どれくらいの人数が、このことに関わってる？」

「ああ、その前に少しすみません」

俺の質問に答える前に、男は霧吹きを取り出し、辺りに水のようなものを吹きかけた。

「すみません、私は綺麗好きなものですよ」

ならこんなところに連れてくるな、と言いたくなかったが、今は抑えておいた。

男は、改めて俺の方に顔を向けた。

「さて、どれくらい、というのは難しい質問ですな。我々は、面白そうなことに惹かれ、集まっているだけの物好きな集団です。具体的な組織などではないのです」

「興味本位だけで、こんな年端もいかない男子高校生を誘拐するっていうのか？ 悪い趣味だな」

そう俺が毒づく、薄く微笑んだ男が、こんどは快活に笑った。

「はっはっは、随分と厳しいお言葉です。ただ、悪い趣味とは心外ですな。我々は、あなたの助けになろうとしているというのに」

「……助け？ 一体どういうことだ？」

男の言葉は、俺にとつてすんなりと受け入れられるものではなかった。というか、まともな人間ならここで、はいそうですかと納得できるわけがないだろう。

「というか、もしそれが本当だとしても、人を誘拐するような奴が、俺にいったい何をしてくれるっていうんだよ？」

男は、にっこりと笑って言った。

「あなた——恋をしていますね？」

どくん、と心音が跳ね上がった。

「我々は、あなたの恋の手助けをしようと思って、ここに連れてきたのですよ」

「貴方には一つ、ゲームをしてもらいます。それにクリアすれば、彼女が貴方のことを好きになるようにしてさしあげましょう」

「……ちよ、ちよと待て。お前、どうしてそんなことを知ってるんだよ？ 俺はお前のことを、これっぽっちも知らないんだぞ？」

男の口から飛び出た言葉の衝撃に、俺は驚きを通り越し、恐怖さえ覚えていた。同時に、この男に対する疑念が、とてつもなく大きくなった。

「ええ、貴方は私のことを知らないでしょう。あつたことなどありませんから」

「じゃあ何で——」

「でも、私は貴方を知っている。今言えるのはこれだけです」

「そんなの、納得できるわけがないだろうが」

全く説明する気のない男に、俺は苛立ちを覚えていた。

「……ちつ、何がゲームだ。あいつが俺を好きになる？ どうしてそんなことができるんだよ。信用できるはずがないって、お前も分かっているだろう？」

「……はは」

「……？ 何だ、何がおかしい？」

「いえいえ、貴方も正直ではないですね」

男の顔は、笑ったままだ。

「……どういふことだ？」

「あなた、私がゲームの提案をしたとき、一瞬だけですが、期待していたでしょう？」

「——な」

「貴方の彼女への愛情は、良く知っています。調べましたからね。なんせ、数年前から好きだといふのであればなおさらでしょう」

最早、俺にとってこの男は単なる老人ではなく、恐怖の対象と化していた。

「恋心というのは厄介なものですな。悩みは、時間がたてば消えていくのに、恋心は時間がたつほどに膨れ上がっていく。貴方もそうなのではない？ 彼女が欲しくてたまらない、自分だけのものになりたい。その願望を、私たちは叶えて見せましょう。きつと、貴方にとって幸せな人生が待っていることだと思いますよ？」

男の話は、なぜか俺の頭の中に入ると入っていくようになってしまっていた。まるで、催眠術にでもかかったような気分だ。そしてあろうことか、俺は彼の言葉に、少しづつ惹かれてしまっていた。

「……分かった、やってやるよ。その代わり、約束は守るんだろうな？」

「ええ、もちろんでございます」

俺の言葉を、男は今日一番の笑みで迎え入れた。

「ああ、それともう一つ、貴方に条件があるのですが」

「？ 何だよ」

「貴方がこのゲームをクリアしたとき、我々は約束を守ります。しかしその代わり、貴方から一つ、頂きたいものがあります」

「頂きたいもの？ 何だよそれは？」

「今は言うことはできません。貴方がゲームをクリアした時に、提示をさせていただきます」

「それを断つたら？」

「交渉決裂でございます」

もう、無茶苦茶すぎる話であることは、だれの目から見ても明らかだった。だが今の俺には、そんな当たり前のことが全く理解できていなかった。

「ああ、いいぜ。何でも貰っていきやあいさ」

「あいがとうございます。それでは、早速ゲームを始めましょうか」
男はそう言うと、胸元のポケットから、数枚の写真を取り出した。

「ゲームといつても、ちよつとしたクイズのようなものでございませぬ。私が今から出す写真を見て、仲間外れを当てていただきたいのです」

「……なんだか、子供じみたクイズだな」

「いえ、きつと答えづらいものだと思えますよ。貴方にとっては」

俺にとつては、とはどういう事だろうか？ その言葉が、俺の頭に引つかかった。

「あまり時間をかけるのも申し訳ないですし、早速始めましょうか。どうぞお座りください」

男に勧められ、俺は椅子に座った。こんな状況でも、年若い男を差し置いて自分だけが座っているというのは、なかなか歯がゆい思いがする。

「それでは、始めさせていただきます。まず、一枚目です」

男は一枚の写真を、机の上に置いた。そこに写っていたのは――

「……集合写真？」

その集合写真を、俺はよく知っていた。それもそのはず、その写真は、俺が中学の頃に行った修学旅行の時の写真なのだから。

「どうです？ 懐かしいでしょう。貴方の昔のご学友の方々ですよ」

「……いや、懐かしくなんかないね」

「ほう、それはどうして？」

そう、俺にとつてはこの写真は何ら懐かしいものではない。何故なら――

「俺はこの写真を、毎日のように見ているからだ」

そう、俺はこの写真を家の自室に飾っている。

他の人間からしたら、単なる思い出の写真のうち一枚かもしれない。だが、俺にとつては大事な一枚だ。

この写真に写る俺の隣には、彼女がいる。俺が振り向かせたい、あの人が。

それだけ言えば、俺がこの写真を特別に思う理由は明白だろう。

気持ち悪いと思われるかもしれない、彼女が聞けば引いてしまう

かもしれない。だが俺にとつては、大事な一枚である。それはこれからも変わらない。

「ふふ、美しい純愛ですな」

「そう言ってくれるのはあんなだけだろうな」

「いえ、そんなことはありませんよ？ 少なくとも私は、それを聞いて喜ぶような人間を、一人は知っています」

「へえ、変わった人もいるもんなんだな」

俺は思わず、笑ってしまっていた。その笑顔が、すぐに消えることになることも知らずに。

「さあ、二枚目に参りましょうか」

男は二枚目の写真を机に置く。

瞬間、俺は絶句した。

「………なんだよ、これ」

そこに写っていたのは、二人の男女。街中を歩いている様子だ。

男の方は、名前どころか、顔も見ることがなかった。必死に記憶を探っても、思い当たりがこれっぽっちもない。

だが、その隣に写る女性は、見間違はずがなかった。

「なんで――なんであいつが――」

男の隣には彼女がいた。制服から私服に変わっても、彼女は彼女のままで。

思わず一枚目の写真を手に取って、二つを見比べる。どうか間違いであってくれ、と強く念じながら。

だが、間違えようがない。この二人は、明らかに同一人物だ。俺が愛する、あの女性――

「……誰だよ、この男。あんななら知ってるだろう？」

「さあ、私は知りませんな。女性の交友関係を調べ上げるほど、下品な人間ではございませんから」

こんな写真を持っている時点で、下品も何もあつたものではないだろう。だが、今はそんなことはどうでもよかった。

思考が揺れる。頭が震える。顔が青ざめる。背筋が凍る。足が震

える。

椅子に座っていなければ、俺はその場にへたり込んでしまっていたことだろう。それほどまでに、俺は混乱してしまっていた。

「さあ、次の写真にいきましようか」

「ちよ、ちよつと待てよ、まだ——」

俺の言葉を聞き終わる前に、男は三枚目の写真を出した。

さっきの写真に写っていたのと同じ二人が、レストランで食事をしてた。

「——」

最早、声は出なかった。

「四枚目」

二人が、一緒に映画を観ていた。

「五枚目」

二人が、一緒に水族館のイルカショーを見ていた。

「六枚目」

二人が、一緒にゲームセンターで対戦をしていた。

「七枚目」

二人が——一緒に——彼女の家に——

「うわあああああああああああああああああ！」

もう、何も見たくなかった。つらい現実を、見たくもない関係を。

——実るはずもない、片思いを。

「……ああ、分かったよ。仲間外れ」

なるほど、どうりで答えづらいわけだ。答えてしまえば、認めて

しまうことになるから。

「仲間外れは——俺だ」

この恋が、絶対に実るはずのないものだ。

「おめでとうございます。正解です」

男は、軽く拍手をした。その拍手は、その男の心からの賛辞に思えた。

「……は、はは」

乾いた笑い声は、自然に出てきた。

「俺は今まで、いったい何をやってきたんだろうな？ バカみたい

じゃねえか。叶いようない恋を、何年も続けてきてよ……」

もう、何もかもがどうでもよかった。いつそのこと、全部投げ出

してしまえば、どれだけ楽だろうと思ってしまった。

「何にせよ、貴方はゲームをクリアしました。貴方には、報酬を受

け取る権利があります。どうなさいますか？」

「……随分と趣味が悪いな、あんたは」

ああ、本当に趣味が悪い。こんなものを見せられて、それでも彼

女の愛が欲しいと、心から思えるわけがなかった。

「俺はあいつが好きだ。好きだからこそ、自分のものになってくれ

ること以上に、幸せになつてもらうことの方が大事なんだよ。こん

な形で受けた愛なんて、ただの作り物だ。そんなものを、俺は欲し

ているわけじゃない」

俺は男に、精一杯の笑顔を作つて言つてやった。その頬は、知ら

ぬ間に濡れていた。

「……強い人ですね、貴方は」

「強くないさ。ただ、諦めが良いだけだ」

「いえ、貴方はとても強い。私のような人間より、とても」

男の顔は、それまでの笑みを消し、陰りのある表情になっていた。

「私は……とても弱い」

「は、えらくセンチメンタルな誘拐犯も居たもんだな。俺は感謝

してるんだぜ。本当のことを教えてくれたあんたに。これで、何年

も抱えてきた悩みが消えたんだ」

「……すみません、このような事になってしまって」

男の顔は、とても暗い。その中には、迷いと、後悔と、反省が入

り混じっていた。

「……なんだか、本当のあんたを見れた気がするよ。じゃあ、俺はそろそろ帰らせてもらうぜ。送ってくれや」

俺は、出口に向かい、ドアノブに手をかける。そこで、ふと疑問が生まれ、ドアを開こうとする手を止めた。

「そういや、俺が報酬を受け取ったとして、お前は俺から何を貰うつもりだったんだ？ どうせだから、教えてくれよ」

男は、ゆつくりと口を開いた。

「それは——」

「……………はは、とんだペテン師だな」

男の答えに、俺は思わず笑ってしまった。

そんなものは、今の俺には必要がなかったから。

「そんなもん、タダでくれてやるよ」

「……………よろしいのですか？」

「ああ、いいぜ。貰ってくれた方がさっぱりするしな」

そう、今の俺には、それは持っけていても意味のない物だ。それに

「——それに、ずっと持っけてても、辛いだけなんだよ」

そして、俺の意識は途切れた。

目が覚めると、そこは小さな公園だった。もう、日は傾きかけて、遊んでいる子供の姿もない。

「……………」

俺はゆつくりと起き上がった。その拍子に、ポケットから何かが落ちた。

「……………」

それは、一枚の写真だった。一人の女性が、にっこりとほほ笑んでいる。見たところ、俺と同じくらいの年だろうか。

しばらく写真を見てみると、どこからか、こちらに駆け寄ってくる女性の姿が見えた。

「ごめん、待たせちゃった？」

その顔は、ポケットに入っていた写真に写っている顔と同じものだった。どうやらこれは彼女の写真らしい。

「来るの早いねー。私は準備に時間かかって、ギリギリになっちゃったよ」

彼女はとても明るい表情で、俺に話しかけてくる。

「……………」

「男の子と二人で出かけることなんて全然ないから、少し緊張しちゃうかな。昨日、お兄ちゃんに色々教えてもらおうと思っけて、一緒に色んなところ周ってもらっけてたんだけど、やっぱり難しいや」

彼女は、少し照れたように笑った。

「だから、今日は君が私をエスコートしてよね。さあ、行こうか」

彼女は、俺の手を引いて歩きだす。だが、俺は彼女を引き留めた。

「あの……………ごめん」

「ん？ どうしたの？」

彼女はきよとした顔でこちらを見た。

俺は、彼女にどうしても聞いておきたいことを聞くために、口を開いた。

「君……………誰？」

「……………え？」

かすれた記憶の中に、わずかに残った言葉が頭をよぎった。

『すみません、こんなことに巻き込んで』

『あの子には、まだ早い』

あれは一体、誰の言葉だったのだろうか？

了

mayklack

Mino

足元すら見えない宵闇の中、一人の人間が奇妙な形の車を走らせていた。その車を形容するなら、小さな馬車の荷台に、無理やりハンドルと運転台をくっつけたようなもので、そこから目を光らせているのは、少しの機微も感じ取れない無表情を顔に張り付けた青年だった。小柄なところを見ると、少年と呼ぶ方が適当かもしれない。彼は身の丈に合わない大きめのコートを羽織っていて、その襟には「ラテ」と刺繍が施されていた。舗装されていない荒れ野のせいで、運転席はがたがたと揺れる。

「朝までに着けばいいけど」

ラテは小さく呟き、欠伸交じりに固形食糧をかじりながら、手馴れた風にハンドルをさばく。吹く冷たい風が、さらさらとラテの頬を撫でた。それがくすぐったく、身体を少し震わせる。

目を凝らして、障害物がないことを何とか確認しながら、しばらく車を走らせ、ふと運転席の地図に目をやる。ある学者の作った、今の世界における正確な地図だ。信用はできる。

目的の地までは、あと五十キロほど。

そんな事実を確認し、ラテは鼻のため息をついた。

この世界が減んだのは、五百年ほど前の話になる。

原因はよく分かっているらしい。けれどその際に地球上のあらゆる文明が、一度滅んだ。人類の積み上げてきた歴史や社会がすべて、水泡に帰したのである。

そのレベルまで下がってしまったら、もはや残った文明人は生き残れないと、予想されていた。火を起こして生き物を狩る。田畑を耕して作物を得るといふ生活は不可能だ。

だが現在、人類はしぶとく生きている。

その最も大きな理由は、過去の技術が一応残っていたことにある。いわゆる遺跡と呼称される空間。そこにはいくつものロストテクノロジーが眠っていて、それを発見したことにより、人類はある程度の文明、生活水準を取り戻したと伝えられている。現時点では遺跡は五百以上発見されていて、見つかったくないものを含めればその十倍、五千は存在すると、どこかの学者は言った。

遺跡探索は立派な職業となり、それを生業とする者も、この世界には溢れている。

「よし、着いた」

ラテは車のエンジンを切り、荷台から大きなカバンを取り出した。目の前には高々と聳え立つビル。緑が生い茂り、古びて見えるものの、五百年経過しても崩れていないことから恐らく頑丈だろうと予想した。空を見上げると、灰色の雲を貫くように直方体の天辺が伸びていた。少なくとも百メートルは超えている。そそり立つ壁には窓が規則的に並べられ、下から上まで、灰色を埋め尽くしていた。

「……行くか」

ビルの迫力を意にも介さず、相変わらずの無表情のまま、暗鬱な塔の入り口と対峙した。ガラス張りの自動ドアは、自動では開かず無理やりこじ開ける。

一階には何もなかった。

本当に、何も無い。

「すつからかんだ」

今までに探索してきた遺跡では、入ってすぐの層に簡単な仕掛けがあるのみで、それは一般的な子供でも開けられるような、まさに子供だまし。大体の人間はそこを突破可能だ。ラテ自身も、そんな謎は朝飯前に解決してきたが、こんなパターンは初めてだった。

「まあ、だよな」

辺りを見渡すと、何も無い。本当に入り口以外は何も無いのだ。あるべきもの、階段やエレベーターもない。

「……………」
つまり、ここで行き止まりなのだ。天高く伸びる塔なのに、登れない。登る手段は用意されておらず、一階より上は垣間見ることもできない。始まった瞬間に、終わる。

余りにも真つ白い部屋のせいで、眺めていると方向感覚がなくなつていった。入ってきた際の半自動ドアを、朝焼けが透かしてラテを照らす。目を細めて、太陽を眺めると、鳥が飛んでいるらしい、甲高い鳴き声が聞こえた。そう言えば今日は寝てない、という言葉が口をついてこぼれる。

「あれ？」

そこまでして、違和感を覚えた。

太陽だ。

「ここ、窓がない……………」

ラテは自動ドアの脇に手を当て、ぼつりと呟く。外から見た限り窓があった場所だが、ここにはない。ただのつべりとした白が広がるだけの部屋。病室にも似た、無機質な空間。

シンプルに、この何もない部屋はヒントだった。子供だましという不文律は崩れない。

ラテは入り口を開いて外に出ると、目視でビルの壁と先ほどの部屋、その隙間に面している窓を探し、カバンを下ろして中をあざり始めた。

「子供だましに騙されるって、思ってたより屈辱なんだな……………」

カバンから爆弾を取り出しかけ、深呼吸をしてからガラスカッターに持ち替える。ラテの無表情が、多少の苛立ちを含んでいるのも気のせいではないだろう。

しばらくしてガラス窓に丸い穴が開くと、そこに腕を突っ込んで鍵を外した。

窓を押し上げ、身体を滑り込ませる。

中には長い廊下が伸びており、その途中、ちょうど階段まで十メートルほどの場所から、前後を見渡す。廊下はリノリウムのような材質で、足音は響いた。一応、この廊下には罫は見当たらないようだが、ラテは慎重に歩を進める。

警戒した数十歩を踏み込み、かろうじて階段に着いた。

胸を撫で下ろす暇もつもりもなく、階段を見上げる。真つ白な階段は汚れ一つなく、侵入者の存在を厳然と待ち構えているようだ。

かつんかつんと、高く見える階段に音が響く。一段飛ばしに躍り場まで駆け上がり、次の階層へは慎重に確認をしてから駆け上がる。今までに何度もしてきた反復行動だ。絶対に失敗することはない。

現時点で死体がないことから考えるに、ある程度確認せず登っても構わないと思うのだが、念には念を入れて確認を繰り返す。

二階、問題ない。三階、問題ない。四階、問題ない。

口の中で毎回呟き、速度を落とさず、朝日の中を駆け上がる。

「！」

五階の踊り場を確認した際、自動小銃、アサルトライフルがあり、慌てて身を隠す。リュックの中から双眼鏡を取り出し、手すりの隙間から観察する。

踊り場にはライフルが一つ、可動できるレールに乗って、こちら側の階段を狙っている。恐らく、センサー式だろう。どこかにあるセンサーに反応したら、すぐさま小銃の弾が発射される仕組みだ。今までに見たことがあるタイプの罫であり、対策は簡単である。

ラテは駆け出した。レールの流れる範囲は狭い。小銃はある程度

上下に可動する金具で固定されていて、機械仕掛けで動くのだろうと予想できた。そしてその場所の下には多少の死角がある。センサーの配置は分からずとも突破は可能だと、確信していた。

小さな電子音が鳴り、小銃が火を噴く。高速の弾丸がラテの身体を目かけ、空気を裂いて駆け荒ぶ。音を聞いた瞬間、滑らかに身体

を転がし、躍り場に飛びこむと、ちょうど頭の上に風が吹いた。
ひゅ、と息を吐き出し、深呼吸をする。妥当な賭けではあった。
もしもここに死体が転がっていれば、かなり危険であることが分かるし、血だまりの中を走るとは転倒の可能性も高める。

死角に入ることはい出来た。あとは無力化をすればいい。ラテはほんの少し、口を緩ませる。

真っ白な壁から、黒い、違和感のある部分——センサーらしきものを探して、反応するであろう場所に一息で空き缶を投げた。小銃が速度を上げてレールを走り、スローモーションの空き缶に照準を定める。そして、ラテは身体を躍らせた。

階段を上がりきったのと、銃声が鳴りやむのがほぼ同時だった。

五階から現在地点の二十五階までずっと、罨は仕掛けられ続けた。センサーなしの自動小銃三連、存在の視認が不可能な地雷、それらをラテは無傷で突破し、階段をひたすら登り続ける。二十五階に辿り着くとラテはあることに気が付いた。

「頂上、か？」

これ以上に階段がなく、リノリウムの床が目の前に広がっているのみ。ここが最上階であることは容易に想像できる。ふと振り返って、吹き抜けから今まで登ってきた階段を見下ろした。一番下の階はまるで点のように小さく見え、もしもここから落ちたら死ぬだろうな、とラテは想像する。

改めて二十五階の躍り場、ぼつかりと空いた長方形の入り口を覗き込むと、中は大きな部屋で、椅子と机が円卓のように並べられていた。壁にはモニターが真っ暗なまま設置されている。窓のない部屋はやけに暗く、それ以上のことは分からない。だが、この部屋に出口はなかった。

少なくとも、ここ以外に行ける場所はないようで、戻るわけにもいかない。さして躊躇することもなく、ラテは巨大な部屋に侵入し

た。踏み出した足が、冷たい空気に包まれる。危うげな罨は見当たらず、確認の難しいものは適宜調べつつ、部屋の大きな机までじりじりと進んだ。

「卵？」

円卓の中心に据えられた球体は、奇妙な幾何学模様——六芒星をベースにしている——に彩られており、サイズは人間の子供が一人入りそうな程度だ。奇妙なことに、他に目ぼしいものはなかった。大抵の遺跡には、一つずつ遺物が残されていることから考えるに、この卵こそが遺跡に配置された秘宝、遺物であることは間違いない。しかし、今まで見つかった遺物は、ロストテクノロジーと呼ぶにふさわしい、機械仕掛けの道具だったのだが、この卵は見るからに機械ではない。

「怪しすぎるだろ……」

言いつつ、これが罨であるとは思っていなかった。生物を罨にするなら、それは群れであるべきだし、そもそも維持することに人の手が必要だろう。餌を与える役は機械でもいいが、餌そのものはなくなるはずだ。探索者を餌にするにしても、今までに一つとして死体は見えていない。

故に、確信した。

ラテは卵を抱えるべく、円卓の椅子をどける。机をずらして中心に歩き始めた。最終地点にたどり着き、あとは脱出のみ。時間制限を付けられていても、罨は同じだ。場所と対処法は記憶しており、単純な作業だとも言える。

卵を持ち上げると、モニターから小さく音が響いた。そこに目を向けると、十分という意味の数字が光っている。

爆弾。遺跡に仕掛けられている最後のトラップとしては、かなり生ぬるい類のものだ。入り口といい、やたらチープな仕掛けが多い。そもそも何かを隠すという意図が存在しないのではないだろうか、という疑いが頭をよぎる。

「十分か……充分」

ちよつとしやれたつもりもなかったのだが、そう呟いて鼻で笑う。ラテは悠々と、階段への扉を開けた。

最上階を後にすると、そこからは簡単だった。

地雷原を駆け抜け、小銃の射程範囲を抑える。ただひたすらに、速度だけを重視して駆けた。

時間制限の十分は恐らく、このビルが爆破されるまでの時間だろう。モニターに表示されたタイマーは起爆装置によく使われるものだと、ラテは知っていたので、それだと分かるだけのアドバンテージがある。

五階の罨、弾丸を潜り抜け、卵を割らないように四階の躍り場へ向かう。もうこれ以上罨はない。安心すべき状況なのに、何か胸騒ぎがした。違和感が頭を靄に包み、思考が進まなくなる。

三階に辿り着く。罨はない。

二階に降りた。電灯が足元を照らしている。

一階で、気が付いた。

「……窓がない。そういうことか」

二十五階から今まで、一度も窓を見ていない。

一階の窓は全て、いや、一階の窓はおろか、すべての窓が開いていない。窓はすべて、シャッターで閉じられていたのだ。

つまり、それは――

「出口がない」

この遺跡は、出られない仕組みになっている。間違ひなく脱出する方法はあるはずなのだが、思いつかない。時間が足りない。

時間感覚に自信があるわけではないが、あと三分ほどしか残り時間がないと、多く見積もって三分しかないのだと、否応なしに理解させられていた。

「どうする？」

どうする？

自問自答を何度も繰り返す。

のつぺりとしたクリーム色のリノリウム、灰色に覆われた窓と壁、電灯が光る天井、もはやどこにも行きつけない階段、とてもこの場にそぐわない、唯一の人間。

カバンの中には、爆弾。だが、恐らくこのシャッターも壁も壊せない。さすがに分厚すぎて、通れるほどには壊しきれないだろう。拳銃なんて持っていないが、持っただけでも意味はない。

「……間取りと、壁……」

ラテは、手のひらを窓と反対の壁に当て、ゆつくりと、正確に計算を巡らせていく。ぼうつとした目で歩きながら、壁に視線を巡らせた。

「ここだ……この隣が、あの部屋だ」

ある一点。壁のある一点に手で体重を預けて、深い思考の終着点、その小さな足場を着々と固めていく。確証となる物は、建物の幅と廊下の幅、そして探索者の勘。

この向こう側に、一階のエントランスがある。

「一か八か、全てかゼロか」

ふらりと壁から離れ、カバンの中から爆弾を取り出す。入った時に爆弾を使わなかったことを改めて思い出した。あの時使っていれば、今、確実に死んでいた。

「案外、死ぬかも……」

ラテは躊躇することなく、爆弾のスイッチを押した。

数分前まで、しっかりと形を保って、探索者を待ち受けていたビルは、もはやただのガレキと化し、中にいた者が生き延びている可能性は、限りなく低いだろうことが否応なしに分かった。

「本、見つからなかったな……」

ラテはそんな光景を、車の荷台に身を預け、本を片手に眺めていた。運び出した卵は、もう荷台に積みこまれ、ラテからすれば右手

にある。

荷台には卵のほかに、大量の本があった。どれも、今までにラテが集めてきたものだ。

「むーっ」

「ん？」

突然、小さな声が聞こえてきた。空耳だろうか、と頭に浮かぶ。次いで、ピシツと音がした。

「むー」

「何か聞こえるな……」

明らかに聞こえてきた。右から聞こえてくるその声は幼いもので、どこか怒気を含んでいるようでもあった。

「いや、まさか……」

右側には何がある？ 卵がある。卵と本しかない。

ラテは慎重に振り返り、自分の想像が間違っている事を期待しつつ、その声の主を確認しようとした。

「まーっ」

「うわあ……」

嫌々ながら振り返った先には、卵のヒビから顔を出した、満面の笑顔があった。綺麗な亜麻色の髪を持った可愛らしい、十歳にならないほどの少女。まるで、ラテと対照的な表情だ。

「目玉焼きにしようと思ったのに……残念だ」

「んー？」

大して残念そうではない声音で言うと、少女は不思議そうな声を出した。まるで、言っていることを理解していないようだ。

「なんで卵から女の子が……困ったな……」

「コマ！」

困った困った、と呟いていると、少女がいきなりそう叫んだ。

「困った、のコマね……」

呆れつつも、ラテはこれからのことを考えていた。この少女をどうするべきか、考える。試しに、連れて行くか。

「そうだな……じゃあ、コマ。着いてくるかい？」

「うー！」

般に包まれたままの少女と、コートを着た探索者は、対等に顔を合わせ、そんな他愛のない会話をする。彼女の笑顔を見ると、

ラテは少し、この子、コマと旅をするのも悪くない、という考えに至っていた。

「じゃあ、行こうか」

「うー！」

そんな元気な声を背に受けて、ラテは車のエンジンを回す。

ガレキの山を置き去りに、二人を乗せた車はゆっくりと旅立っていた。

続

写真よりも写実的な

小刀

窓に差し込むは幽かな木漏れ日、陽の未だ登り切つてない早朝。山を抜ける鳥の唄と涼やかな風音に心を静めながら、私は一人画布に向かう。描いているのは白地に浮かぶ一本のナイフ。使うのは鉛筆一本、背景もないそれは一見ただの静物、デッサンでしかないと思われそう。実際には模写している対象など何もないのだが。

そこから掛けること十数分ほどで、鉛筆を置く。細部まで含めて一つの「作品」の出来上がりだ。今にも出てきそうな程には細かく描き込まれた一作、しかし所詮は画布の上に石墨の濃淡が乗っているだけに過ぎないそんな一作に、私は手を伸ばして「掴み取る」。右手にはつきりとした金属の質量を感じながら、目の前の画布に「何も描かれていないこと」を確認。無事成功と机にナイフを置いたところで、突然ドアが開かれる。

入ってきたのは私のお兄ちゃん、料理用の筥のエプロンを所々絵の具で染めて、額を拭いながら話し始める。

「妹、朝飯出来たから食いに来い。親父は先に食つて引きこもつてるから二人でな」

「あ、今行くね。新しくナイフ作つたから一緒に持つてくよ」

「おー、いつも助かるわ。最近切れ味悪かつたし」

そんなやり取りを挟みながら、私たちは台所へと向かった。

「今朝のサラダはどうだったよ？」

「塩と胡椒がしっかり効いてて美味しかった。けど胡椒つて今までなかったよ、また作つたの？」

「おう、もつと言うならトマトと胡瓜も俺製だ。本読んでたら一応旬らしいからな、せっかくだから作ってきた。ただドレッシングとやらのレシピはやり方分からなかったから夜使う胡椒で代用したん

だ

「なるほどー」

お兄ちゃんお手製の朝食を食べて十数分、食器洗いと洗濯を済ませたそんな一幕。ふと私は、ここにいないお父さんの話題を出してみることにした。

「ところで今日の十時から十二時だけ、お父さんにお客さん来るの」

「ああ、食料をくれるのは有り難いけど部屋に籠つてなきゃならんのが面倒だよな」

「まあ私達のがばれたらマズいし……」

「だよなあ、じゃあ俺先に戻つてるから早めにな」

「うん」

それだけ言い残して、私たちは自分の部屋に戻る。空いた時間で何を作ろうか、そんなことを考えながら。

この世界には色々な生き物がいる。動物だったり植物だったり、あと人間だったり。昔は私達みたいに山奥で暮らしている人間もいたらしいけど、最近では皆山の下で高い建物を立てて生活してる、らしい……というのを本で読んだ。多分こんな喋り方をしたら他の人に「何でそんなに他人事なんだ」って言われるんだろうな。結論から言えば、私達兄妹が恐らくは人間じゃないのが原因なんだけど。曰く、ちよつと前に人間同士が戦争を起こしたらしい。確か名前が第三次大戦だったつけ。その後から人間の中に、まるでフィクションみたいにおかしなことが出来る個体が発生するようになったそう。触らずに物を動かしたり、突然何かに火を付けたり、他人の考えていることを覗き見したり。そういうのを全部ひっくるめて能力者って言うらしいけど、私達のお父さんもそれだった。

「描いた物を具象化する能力」。本物さながらな正確さで描いた絵に力を込めると、絵の中からそれが実際に出てくるって能力だ。今朝私がナイフを作つたのもこの能力を使ってだったりするんだ

ど、まあそれは一度置いておいて。その能力で生み出されたのが私とお兄ちゃん、つまり私達は一応、お父さんの「作品」ということになるそうだ。まあお父さんは——基本的に部屋に引き籠もって出てこないことを除けば——自分の実の子供みたいに扱ってくれるのがとてもありがたい。

聞いた話、お父さんは結構有名な画家さんらしい。今日来るお客さんもお父さんの関係者で、絵を渡す代わりにお金と食べ物を持ってきてくれる。ただお金は山奥だと役に立たないから、基本的には画材とかに代えてもらってるらしい。……まあそんな人達に存在を知られたらお父さんの名前が傷つくかもしれないってことで、私達も自室に引き籠もってると言うわけで——。

「妹よ、今いいか」

朝方と同様、突然ドアが開きお兄ちゃんが入ってくる。さつきとは違って動きやすそうな軽装、半袖のシャツから見える肌はこれまで絵の具だらけだ。

というか、マナーとしてはノックの一つくらいして欲しいけど、正直見られて困るものもないからそんなに困らないんだよね。

「どうしたの？」

「予備にしたいから工具と燃料一式揃えたいって欲しい。そこまですべて優先度は高くないからある程度しつかりしてれば問題ねえ」

「おつけー、明後日までに作っておくね。だからケーキちようだい？」

「……強かなやつめ」

早速ドライバーの描画に入りながら、うまいことデザートをおねだりする。こんな所にお菓子売ってるお店なんてないし、私は料理が得意じゃないからお兄ちゃんに頼むしかないんだよね。というか満更でもなさそうだし、口元緩んでるし。

……え、自分でケーキの絵を出して食べばいいじゃないかって？
それが出来れば苦労しない訳で。どうもお父さんの能力が中途半

端に継承されたのか、私は生き物とか食べ物とかを出すことができないんだよね。逆にお兄ちゃんは武器とか画材とかの無生物が出せない。だからお兄ちゃんは私に工具を頼むし私はお兄ちゃんに食べ物をおねだる。お父さんのお金に頼る訳にもいかなないから、正直二人で成り立ってるだけ願ったり叶ったりなんだけど。

「……なあ妹、お前外に出て行きたくはないか？」

今までの軽い世間話から一転、真剣なトーンで話を切り出すお兄ちゃん。流石に話題が話題なので、私も手を止めて振り返る。

「外に、っていうのは山を降りるってこと？」

「ああ。外は未知で溢れている、こんな辺鄙な場所で数十年生きるよりも山を降りて一週間過ごす方が刺激的な生涯を過ごせるほどには！ どうだ妹よ、お前も一緒に来る気はないか？」

いつになく熱弁を振るうお兄ちゃん、読書が好きな彼にとつて、物語に出てくる「外」はとても魅力的な場所なのだろう。時々軽く目を通す私でさえそう思うんだから。それでも私は、
「今はまだいいかな。というかお兄ちゃんに出て行かれたら私死んじゃうし、二人で出て行くにもお父さんに迷惑かかるし」

「……」

「そもそも私達には『名前』だっていないんだから、ここを出て二人つきり、っていうのは無理だろうからさ」

これも本で読んだけど、外で暮らすには住んでる場所とか生まれとか、そういう「証明」が必要らしい。その最たるものが名前、個人を識別する文字列なんだけど私達にはそれが無い。いやお父さんに頼めば付けてくれるだろうけど……

「とりあえず私は——」

「分かった」

「へっ？」

普段からちよくちよく外に出たいって言ってたお兄ちゃんの割にはあつさり身を引いたなと驚愕していると、彼はそのまま部屋を出て行くこうとする。

「親父にも迷惑かかるしな。少なくとも親父が死ぬまでは言わねえよ、考えが浅かったし」

「そっか」

ドアを閉めようと手を伸ばしたところで一つ聞きたかったことを思い出し、尋ねる。

「そういえば最近、夜に獣の鳴き声をよく聞くんだけど何か知らない？ ちよつと不安で」

最後にこちらを振り返ったお兄ちゃんは、普段通りの笑顔でこう言った。

「俺は何も知らねえよ、まあ気にし過ぎないようにな」

それから時は経ち一か月ほど。私はお兄ちゃんに頼まれて、山中の川まで魚釣りに来ていた。何でも魚料理が作りたくなつたらしいけど、美味しい魚を上手く出せなかつたからということ。多めに取つて残りは私特製の冷蔵庫で保管することらしいので、お昼ご飯とデザートにゼリーを渡されて追い出された。たまにはこんな日もいいだろう。

ちなみに今日はお父さんとお客さんが会う月一日。部屋に籠つてる間にレシビの確認でもするのか？ そんな考えを抱きながら、川の方へと足を進めた。

「大漁かなあ……」

バケツ一杯にピチピチと跳ね回る魚を取め、ふらつきながらも家へと戻る。時々カラスが飛び回つたのが不吉だと思つたけど、襲われなかつただけよかった。

そんなことを考えながら家のそばまで来て、何か違和感を覚える。よく集中してみると、空気がちよつとおかしい。心なしか金物、というより錆の臭いがするよう……

「……ひっ！」

玄関まで来て、その正体に腰が抜けバケツを取り落とす。ガラ

ランと音を立て、中の魚たちが陸に打ち付けられる。せつかくの食事が土まみれになつてしまつたけど、そんなことを気にするほどの余裕もなかつた。

——正体は血の臭い。家の入口にあつたのは、体の所々が食い破られて肉や骨を晒している二人分の人間「だつたであろうもの」。それほど時間が経っていないのか、？ みみ切られた血管は未だに血を送り出していた。どうかその顔をよく見ると、片方はまるでお父さんみたいで……

「ううっ、うえええ……」

思わず胃液が込み上げ、目に涙が浮かぶ。どうしてこんなことにとそこで気付く。お父さんと、恐らくはお客さんが食い散らかされて、じゃあお兄ちゃんも？ まさか助かつたのは家を出た私だけ？ 最悪の予想にたどり着いてしまい、最早耐えられず吐きそうになつたところで。

「おかえり妹よ、ご苦労さんつと……すまねえ、片付け忘れてた」

「お、にい、ちゃん？」

裏手の倉庫から歩いてきたお兄ちゃん。その姿に安心感を覚えて——すぐに背筋が凍る。戻つてきたのが一人だけならよかった、けど今のお兄ちゃんは本でしか見たことのない動物を大勢引き連れて、その動物がみんな口を赤く染めてて、というかお兄ちゃんはさつきなんて言つた？ 「片付け忘れてた」？ それつて……

「おにいちゃんが、やつたの？」

戻しそうになるのを無理矢理堪えて、震える声で尋ねる。なぜとは聞かない。どうやつても聞かない。聞けない。だつて否定してほしいから、俺じゃないつて言つてほしいから。そんな私の願いも虚しく、

「おう、いや俺自身じゃなくてこいつらがやつてくれたんだが。まあ俺が出した奴だから俺がやつたとも言えるな」

さも当たり前という口調で、まるで愛らしいペットでも愛でるかのように猛獣を撫でるその姿に、私は朝までのお兄ちゃんを重ねる

ことが出来ない。見た目だけ全く同じ、全くの別人にしか。

「なん、で？」

「何でってそりゃ、先月言ったろ。『親父が死ぬまで、出て行きたくないって言わねえ』って。けど親父はもう死んだし、ついでに親父の知り合いももう喋れねえから俺らのこともバレねえだろ？」

相変わらず、場にそぐわないヘラヘラとした笑顔で続ける男。

おかしい、ちがう、まちがってる。お父さんを憎んでたとか、お客さんに不満があつたとかならまだ分かる。そうじゃなくて、「外に出たい」だけの為にお父さんたちを、しかもこんな無残な方法で殺してしまうなんて。信じたくない、信じられない。

「というわけで妹よ、これで俺らを縛る奴はいなくなつたな？ というわけで——」

「——いやだっ！」

それ以上先は聞きたくなかつた。ここにいる男は今まで一緒に暮らしていた優しいお兄ちゃんじゃない。犯罪者、殺人者、それもとびぎりの狂人。こんな人と一緒に生きていけるはずがない、一緒にいていい筈がない。

全身全霊の否定を聞かされた男は、一瞬呆けた表情になると、深く溜息を吐いて。

「じゃあお前も要らねえわ、死ぬ」

そう言い指を鳴らした瞬間、今まで動く素振りのなかつた猛獣が私に襲い掛かつてきた。大きく口を開き、鋭い牙に唾液を滴らせて飛び掛かるのは何頭かもわからない。

死への恐怖か、せめてもの抵抗か、腰を抜かしていたはずの私は弾かれる様にその突進から逃れる。玄関口にぶつかる獣たち、一瞬怯みこするもすぐにこちらを振り返り再び向かってくる。死にたくない、その一心で私は山奥へと逃げ始める。

動物たちには知性がないのか、それとも大自然に慣れていないのか。木々生い茂る山の中では開けた場所ほどスピードが出ないらし

く、何とか数分ほどは追い付かれずに済んでいる。しかし後ろを振り返ると、諦める様子もなくこちらに向かってくる猛獣たち。ほんの一瞬でも足を止めたなら、ほんの一瞬でも注意を逸らしたら、その瞬間私の体は美味しく頂かれるのであろう。そうはなりたくない。痛む肺を抑えながら必死に走り——それがいけなかつた。

「っ、っ？」

土を踏みしめていたはずの足が、何か硬さのないものを突き破る。一瞬の浮遊感、そこで前を見て初めて、「自分が川に落ちた」ことを悟った。

「っ、がぼっ?! ごっ?!」

そのまま体も落ち、その弾みで水を思いつ切り飲みこんでしまった。上手く呼吸ができない。いくら川の流れが緩かつたとしても、数分ぶっ続けて走り続けてた人間が服を着たまま落下したらどうなるか。浮かび上がれるはずもなく体はどんどん沈んでいく。その度水を飲んで吐き出し、それと共に体力は奪われ——

自分の行動を悔いる間もなく、私の意識は闇に落ちた。

「白井山の奥地で画家宅が炎上、N名の遺体が発見、ですか。え、動物に食い破られた姿で？」

「……複数人が生活していた痕跡がある？ 画家は独り身の筈なのに？」

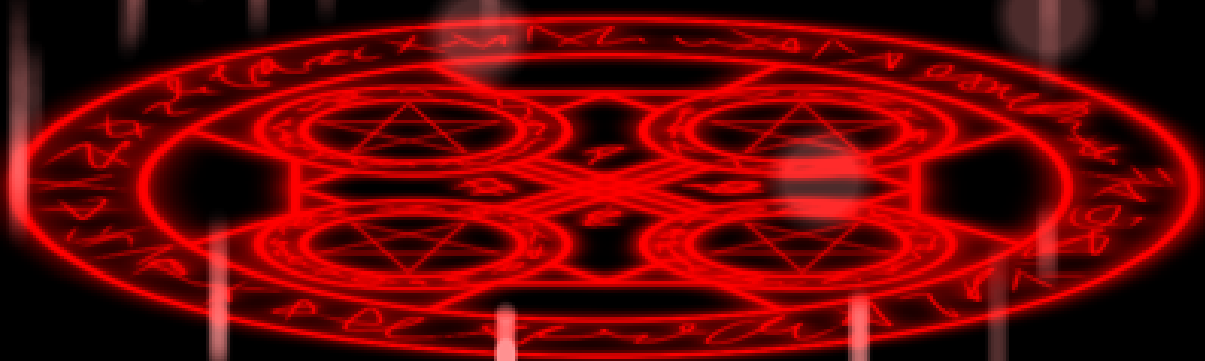
「……えーっと、こつちもパトロール中に少女を一人保護しまして、人が川に流されてる場面を現実で見たのは初めてでした」

「……百地川です。ああ、そういえば白井山からの分流でしたか」

「……とりあえず目が覚めたら話は聞いてみます。そちらもお気を付けて下さいね、署長」

く続く……? ? ?

イラスト作品

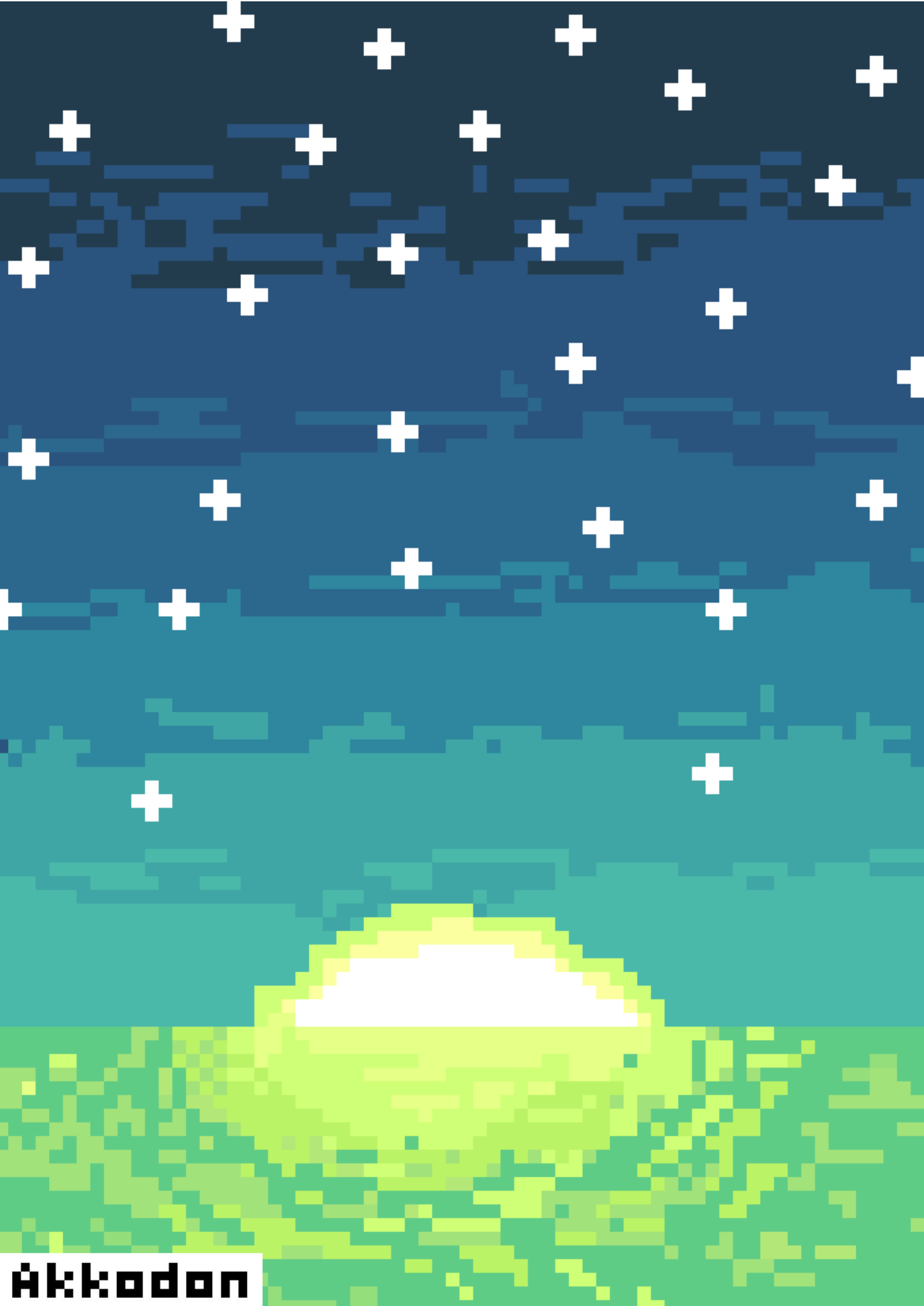


悪戯姫の
Walpurg



20





Akkodon

くろうと



ゆるして…ツ

しめきりに

まにあいませんでした。



猫にゃん



あとがき

ドーもこんにちはー会誌の編集を担当しております「きな粉もち」です！現代視覚文化研究会2017年夏会誌『しらはえのつき』を読んでくださりありがとうございます。いかがでしたでしょうか？

現視研の説明云々はまえがきで会長さんが既にしてくださっているののんびりゆるーくあとがきを書こうとおもいます。

今年の夏も暑いですがみなさんはどうお過ごしでしょうか？私は暑いのが苦手なので毎年クーラーがついている部屋で突っ伏しています……。じゃないと暑すぎて体が溶けてしまいそうになります……。クーラー最高……。とまあ用事がない限りお家から出ることはまずありません。

でも今年はまだダラダラと夏休みを過ごすのではなく、運動をすることにしましたっ！部屋の中で、ですけど……。理由はなんとなくですかね。強いて言うなら、毎年夏休み明けの体育の授業でひどい筋肉痛になってしまいいつも友人に心配されるので、そうなりたくないなーって思ったからですかね。とりあえずやってみました！

結果、始めた次の日見事にひどい筋肉痛になってしまいました（ー）。朝、目が覚めた瞬間にわかりました、「あ、ヤバい起きあがれない。」それぐらい筋肉痛がひどかったです。母親に笑われながら起こしてもらいました。二、三日は筋肉痛がとれませんでした笑。それでも意味もなく頑張つて運動を続けてました。

今も続けておりますが、さすがにだいぶ慣れてきました笑。もう筋肉痛になることはないですし、あとちよつと痩せました。やっつ

ね！

今回なんとなく運動を続けていますが、やっぱり何かを続けることつてとても大事ですね。長い時間を何もしないでダラダラと過ごすより何かしらのことを続けるほうがずっと素敵だと思います。

最後に改めて2017年夏会誌『しらはえのつき』を読んでくださりありがとうございます！また会えることを願っております。それでは！

追記：すつごく遅れてしまい誠に申し訳ありませんでしたああああああああああああ

情報工学科二年

きな粉もち